流星の朧月

和桜白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星の朧月

【Ｎコード】
Ｎ６７２８Ｔ

【作者名】
和桜白兎

【あらすじ】
テイルズオブヴェスペリアの世界に生まれた主人公。
前世は現代日本。ＴＯＶ？もちろんクリアしましたよ。
物語を変えるも変えぬも個人の自由ですよね。
一人の少女はハッピーエンド目指して歩いている・・・はず？

オリジナル主人公についてとオリジナルな説明（ネタバレありです）（前書き）

紹介というより設定メモ。今後の展開を先取りしたくない方、今後の話の展開見えて嫌だなという方には閲覧おすすめできません。
それでもいっか、という方はどうぞご覧ください。
といっても、たいしたこと書けて無いのですが・・・（涙）

オリジナル主人公についてとオリジナルな説明（ネタバレありです）

ステラさん

この小説の主人公。ちなみにテイルズのテルメス譲とは一切関係ありません。

星っぽい名前にしようと思ったらこうなりました。テイルズＡとＶとＷ１．２

しかプレイしていない為投稿してから気付き、超後悔。

しかもテレビＣＭで「ステラ」ってあるの見て

崩れ落ちて頭を抱えた。

そしてそしてＴＯＶ２周目中にパティの

「マリス・ステラ探してます」発言が。

うあああああああああ！！

どっかで聞いたことあると思ったらそれか！出てたよね！思いっきり名前出てたよね！

このアイテム探しに苦労したことが欠片もないので印象めちゃ薄かったというか

忘却の彼方へ飛んでってたというか・・・。

まあいっか、誰もオリキャラさんの名前なんて気にしないさ！むしろ名前が

出てくる時の方が圧倒的に少ないんだから気にしないっ！

・・・・こんな感じの無計画で突っ走る話になりそうです。（涙）

ここからは話の設定のネタバレも多少含んでいますので、ご注意を。

基本設定：年齢不詳のお嬢さん。実は自分でも自分の年齢わかっていない。

翡翠色の目に長い黒髪。

目元口元はしっかりメイク。ウォータープルーフが懐かしい。

黒い帽子を小粋にかぶる。ちなみにアイテムでいうとシャープカ。

メガネを掛けているが、視力は悪くない。どこぞの大佐のような制御装置でもない。

ただの伊達メガネ。

基本戦闘要員。特攻隊長。魔導器持ってません。

生前のゲームプレイ時は丸ボタン連打の

毎日でした。コンボってナニ、美味しいの？

ギルドの自称中間管理職。

ユーリの黒髪をうらやましがっている。

高官2人暗殺は後々死亡フラグが立つのではないかと、なんとかユーリ君の

仕事人モードを回避しようと考え中。ちなみに自分が代わりに暗殺した場合、

いざとなれば逃げて逃げて逃げまくり

最後の手段として地下深くに潜ろうと考え中。

的な事を若い頃考えていた時期がありました。

とにかくハッピーエンドを望む。

可愛いもの好き。当初の目的はラピードに会うためであり、

一行の仲間になろうとは特に思っていなかった。だって、面倒だし。

あ、黒髪は地毛じゃないんです実は。（爆）

所属ギルド：朧月（ヘズィームーン）

通称お節介ギルド。頼まれていないのにお節介を焼くギルド。

子守、草刈から戦闘、店経営まで幅広いなんでもギルド。まるでどこぞの下忍です。

人数は2，30名程度で、その中でもボスの顔を知っているものは数少ない。

ギルドの掟は数多くあり、「勝手に死なない」（ライフボトルの節約）

「倒れる前に宣言」「調子に乗って術連発しない」（パイングミの以下省略）

「死亡フラグ立てるな」（オレ、この依頼終わったら結婚するんだ宣言とか特に）や

「幸せを探せ」などの意味わからないものまで。

ギルド員は特に気にせず、気ままに動く人ばっかり。

規則はゆるゆる。悪いことしたら風格たっぷりボス代理の拳骨が飛ぶ。ほのぼの。

原作開始数年前に緑の帽子に緑の服、伝統を感じさせる装備を身につけた少年が

ギルドに加わる。

ステラさんが率先して修行させる姿が確認された。

「豚鼻の奴がいたら尻尾を狙え！」とか

「私あっち系のラスボスまで面倒見切れないから」とか

「砂漠で変なおじさん見かけたら瞬殺しなさい」とか

叫ぶ姿が確認されたが意味を理解できるものはこのギルドに一人として存在しない。

この設定出てくるかどうかは未定。

ちょっとかわいそうな、立場に捏造されていくキャラ
（キャラ崩壊ともいう）

その1、デュークさん。

私の勝手なる妄想で、すごく天然でふわふわした人になりそうな予感。

とりあえずかっこいいデュークさんを拝むことをこの話に求めない方が・・・。

設定

人間と関わるのが嫌になってしまった人。

でも大貴族出身のお坊ちゃんだったのでサバイバルが苦手の元ブルジョワ。

そして服がひょんなことから破れても、針と糸を持った経験すら無いので

どうにもできない元ブルジョワ。

そして人と関わらない宣言をしたけれど、やっぱり誰かと会話ができなくて

寂しいと思う元ブルジョワ。

行き倒れのところをステラさんが拾って、それから時々ステラさんがご飯を奢る

という変な関係が成立。

ステラさんもラスボスと会えてある意味感動していたし、デュークさんも

話し相手ができて若干嬉しいといういい結果に。

話の内容はなんだか哲学的で難しいし、

人の正義は人の数だけあると考えてる派なので、安易に反論もせずただ聞いているだけという図。

大丈夫、勝手に喋って勝手に満足してるから会話の意味わからなくても大丈夫。

その2、バルボスさん。

なんかちょっといい待遇になったのかなってないのか微妙。

設定

ガスファロストでの印象的な最大の見せ場シーンはカット。

その代わり部下たちと熱血ドラマを繰り広げる存在に。

とりあえず死んでない設定です。

コア泥棒含め多くの罪があるので騎手団が逮捕。

いつか戻ってくるのかとかは不明。

でも熱血部下達はボスの帰りを待ってるといいなぁ。

ひとつの街を作りまとめた人だと思うので、きっと昔はいい人だったんじゃないかなぁ、

と勝手に妄想した結果こうなりました。

その3、ラゴウさん。

この人は・・・いいよね、可哀想な感じでいいよね。

設定

とりあえず現段階死んでません。

ゲームそのままの非道なおじいさん。

けれどステラさん所属のギルドの裏工作にマンマと引っ掛かり、
ロリコンストーカーなどなどの現代的で
不名誉な称号を勝手に与えられた可哀想なおじいさん。
死んでないからいいじゃない。気をしっかり持ってねおじいさん。

独断と偏見と妄想でかわいそうな設定になりそうな人はあと1，2人くらい考え中。

今後また書き足そうかなと思ってます。最終的には本編読まなくても理解できるくらいの
書き込みになりそうで怖い。設定ってどこまで書いたらいいんだろ・・・（焦）

その1、はじまってた。（前書き）

これはＰＳ３版テイルズオブヴェスペリアのストーリーを元にしています。
主にオリジナルの主人公視点で進めていきます。
死ぬ設定の人を生かしたりなどの物語変更きっと大いに出てきます。
オリジナルが好きでない方、ストーリー変更に抵抗がある方。
また私自身の文章の拙さ、更新も明らかに早いとは言えないのでまたまた抵抗がある
方はバックで見なかったことにしてください。
そんなの気にしないさの神経図太い〔賛辞です！〕方は、気が向いたら覗いていただけると嬉しいです。

その1、はじまってた。

輪廻転生ってよく聞く話。どんなに信じていない人だってこの単語は知ってて当たり前。

とてもあやふやだけど、確立した話。

私、占いで〇〇の生まれ変わりだったー、という会話もザラにある。なぜか僧侶が多いけど。

私は今までの人生とおさらばした。

後悔しない最高の人生だった、なんて全く思わないけど、幸せもあり悲しみもありの

平凡な人生を送れたと思う。

そして目を開けると知らない世界。ああ、本当に生まれ変わり云々ってあったんだとしみじみ感動した

のは昔の話。

えーこれってゲームじゃん、と思ってかなりショック受けたのも、昔の話。

ここは新興都市ヘリオード

日々トントンカンカンと街を作る音が木霊する街、完成の色が見えてきた町だ。

最近騎士の重圧が強くなったと感じるこの頃、始まりの狼煙はすでに上がっていたと知った。

「うわ、ちょっと感動。」

所狭しと張られた賞金首の張り紙。こんなもので感極まってしまうのは、私が私であるが故のことだった。

殺人窃盗などの凶悪犯を差し置いて、一面を飾っているのはおなじみの子供じみた落書き顔。

多分主人公のユーリ・ローウェル君だ。

ここの地区の騎士が帝都担当の経験があるせいか、特に枚数が多い。

捕まえる気あるのかと問いたくなるくらいのクオリティに少し頭を

悩ませる。

実は捕まえる気、無かったのかな。銀髪の舞茸さん〔仮〕としては
エステルが誘拐されたままの方が

何かと都合がよかったのかもしれない。ヨーデル殿下が誘拐されて
エステル一人お城なんて評議会が

どう動くか恐ろしいところだ。

そんなことより、と向かう先は「騎士詰め所」の「広報部」。

昨日も一昨日もその前も。

街行く人々がユーリを見て叫ぶ。「賞金首だ！」と。

脱兎のごとく逃げるのはいつもの事となっていた。そしてその後の
不平不満もいつもの事だ。

「最近ユーリ通報されてばっか。おちおち街歩けないよぉ！」

「そうですね、今まではそんなに気付かれなかったのに・・・。」

桃色の髪に陶器のような白い肌、そこはかとなく高貴な容姿をした
少女は顔を曇らせる。

自称「魔狩の剣のエース」は残りの体力を理不尽な思いを込めて叫ぶことに費やしていた。

その顔には「こんなはずじゃなかったのに」とでかでかと書いてあった。

「これのせいだな」

追われている張本人の青年は、新しく拝借した手配書を3人に見せた。

この前まで見ていた落書きのようなでは無く、まるでその人物を写し撮ったかのような絵がそこにあった。

表情もよく捉えられており、少し微笑んだ表情なのになぜか人をおちょくっているように見えてしまうのもご愛嬌。

１０人が見れば１０人とも、これはユーリだと言うだろう。

「これっ、ユーリそっくりになってる！」

「んもーなんでこんな面倒になるのよ！アンタ！もう街に入るな！野宿しなさい！！」

最近旅に加わった魔導士の少女は早くも旅に出たことを少し後悔していた。

勝手について来たのは自分だが、少なくとも自分の家には

ベッドや研究に必要な物資もそろっているのだ。

あまり外出することのない彼女に野宿はキツイ旅だった。

「オレそっくりのいい男になったのはいいけど・・・こりゃ勘弁だな。」

一行は罪の赦免宣言を受けるまで、主に野宿を強いられたのだった。

その2、出会ってた。

亡き都市　カルボクラム

以前来た時は、ギルドの街のひとつだった。統治するボスの顔のせいか、やけに荒くれ者が多かった。

お年寄りや小さい子供は転送魔道器の恩恵を受けていたが、若い者達はほんの近所の家々を渡り歩く際

でもロッククライマーのごとく岩壁をよじ登り、降りての繰り返し。

そんな当たり前の日常生活のおかげでここの者は足腰も強く、また他の地域でも地層の

崩れやすさなど経験で分かる為、山岳地帯の護衛に関してはギルドの中でも飛びぬけた存在だった。

数年前まではしっかりした街が築かれていたのに、今では残念だが見る影もない。

廃墟をぶらぶらしていたら、「魔狩の剣」のメンバーたちがぞろぞろ列を組んで歩いている。

おー、あのギルドってこんなに人いたんだ。いつも4．5人で行動してるから気にしていなかったが、

実は結構な数のすごいギルドだったらしい。

「ステラお姉さん！」

顔をちょっと輝かせてやってくるのは「某魔狩のエース君」の思い人、ナンだ。

ちょこちょこと体に似合わない大きさの鎌を持ちながら歩くので、余計に華奢さが目立っていて愛らしい。初めて出会った頃、彼女は鎌を貰ったばかりで

うまく使いこなせていなかった。

重さに気を取られ刃で怪我したり、攻撃するたびによろけて自滅してたりと危なっかしいの

連続で、「とりあえず武器の重さに慣れるまでは」と代用品として同じ形の刃をつぶした物をプレゼントしたのはいい思い出。

当時１０歳にも満たない子にそんな危ないもの持たせるな、とティソンに怒ったのは記憶に新しい。

どうやら「速やかに当地区より立ち去れ宣言」はされないようだ。

昔餌付け・・・もといご飯作ってあげた仲ですから。懐かれてるといいなぁ。

「ナン久しぶりー。えっと、これは盛大な祭りでもする訳？」

「おめぇ、俺たちの邪魔する気か？」
ちょっと頭皮の面で将来心配なティソンさんが口を挟む。
「しないしない、私は依頼で来たの。昔ここに住んでたおばあちゃんから
思い出のアルバムを持ってきてくれって。」
数年前、うっかり忘れ物をして取りに帰ろうとしたが、騎士団により街道を封鎖され、
取りにいけなかったという。騎士とやり合うと後で面倒なのでその時は諦め、ちょうど今になって
私に頼んできた。
一人暮らしで腰が悪いながらも日々しっかりと生活しているおばあちゃん。
もう先短いからねぇ、と依頼してきたが、あと数十年は余裕そうな気がするのは気のせいだろうか。
もう使わないからと報酬に剣をひとつ貰ったが、かなり手入れされていて切れ味も鋭く、
なかなかの業物だ。前衛タイプだったもんね、あの人。
「カロルは？」

「あいつぁ、クビだ。」

おお、遂に。ナンは悲しそうに唇をかみ締めている。

「カロル・・・。」

「ナン、あんまり過保護にしちゃ、カロル成長しないよ？ちょこちょこ助けてあげてるみたいだけど、

時にはガツンと突き放してあげるのもまたカロルの為だって。」

素直にうなづく姿。これでクビ宣言を心置きなく伝えられるだろう。

案外この子ピュアなのだ。

「この地区を完全封鎖する。ナンは入り口周辺で見張っておけ。」

はい、と威勢よく走り出す背中を見送った。クビ宣言まで後数時間。

「ひぃっくしゅ。」

最近は天候が崩れやすい。天候を操る魔導器とやらの影響だと思うが、傘を差して戦うなんて器用な

事ができる訳でもない。

黒い髪は水を吸って重くなるし、メガネには水滴がついて視界が悪い。早く帰ろうこんな所。

ガチャリ

「ワン！」

「お」

「「「「あ」」」」

おばあさん思い出のアルバムを見つけ、後はダングレストに向かうだけ。

ドアを開けるとローウェル君一行がいました。

「「あー！」」

カロルとリタが叫びます。お子様コンビ、気が合うんですね。

「ステラ！」

「誰です？」

「ちょっとステラ、あんたどこほっつき歩いてたのよ！」

へらへらと手をあげて答える。

そう、この一行のうち3人と1匹とは顔合わせ済みです。リタの家には昔住み着いていました。

本の整理とか本の整理とか本の整理とかに追われてました。食事も時々担当してました。

クレープならお手の物です。ってあれ？

「カロル・・・・・泣いた？」

あれ、この子このシーンで泣いたっけ？目と鼻は真っ赤で、涙の伝った痕が残っている。

「ちちちっ違うよ！！ちょっと目にゴミが入ってすごく痛かったから擦っただけ！だけだから！」

「そうそう、ナンって子の話が終わったとたんにちょうど良くゴミが入ったんだとさ。」

いたずらっ子の目が輝いてますユーリさん。限りなく鼻声で、うう、と唸る少年が可哀相だ。

後ろで話についていけない桃色髪にひょいっと手を出す。握手のポーズだ。

「ステラです。よろしくー。」

「あ、はい、エステリーゼと申します。」

よろしくお願いします、と手を握られる。

「・・・・・ステラさん、どこかで会った事、ありませんか？」

ちょっと首を傾げて尋ねられた。曰く、見覚えがある顔をしているらしい。

「ないなぁ。完全初対面だよ。」

私はそう言ってにかっと笑った。

その2、出会ってた。（後書き）

2話目です。捏造してるところもありますご注意を！
ストーリー序盤のできごとは、はしょりました〔汗〕
ここからちゃんと進んでいけばいいけど・・・。
前途多難です。。。

その3、つかまってた。

とことこ静かに私のもとへ近づく姿を見て思わず微笑んだ。

すらっとした無駄の無い体つきに深くキリリとした瞳。

昔会った頃は小さなやんちゃ坊主だったのに、今やパーティー1の男前と私は信じて疑わない。

そして一通りの会話が終わったところでやってくるなんてさすが空気を読む犬。

「ラピード・・・。かっこいいじゃん・・・！！！」

「ああ、いい男だろ。」

ユーリは自分の事みたいにちょっと得意げ。親ばかってやつだ

そう、私がこのトラブル吸引体質な主人公一行に近づこうと思った一番の理由は

とってもかわいくってかっこよくってアイテム渡しが上手で

戦闘力半端ないこのわんこに会うことだった。

４年前に会った時はふわふわのもこもこで愛嬌ふりまく子犬だった。

ラピードは私の隣に腰を下ろして、あくびをひとつ。かわいいなぁ。

じいっと見つめるとちょっとやんちゃなきらきらとした瞳で

見つめ返された。可愛く小首をかしげる姿に私はノックアウトだよ。

可愛さはまったく失わず、クールさプラスってどんだけクオリティ

上げるんだこの犬は。

これから何目指して進化するんですか。思わずその背中を抱きしめ

た。

視界の端でしっぽがぱたぱた揺れていたのを見てお姉さん胸きゅん

ですよ。

「ステラには、あんなに懐いてるんですね・・・・。」

目はどこかの愛眼動物のようにうるうるさせ、悲痛な声でエステル

が語る。

表情と比例するかのように、濡れた髪もしぼんでいる。

私とは正反対だ、どんより雲を背負ったエステルの顔。

ちょっと離れたところでむくれるリタに挨拶ひとつ。

「久しぶりだね、リタ。術式の探求がんばってる？」

「あ、当たり前じゃない！アンタ達のギルドが来てからアスピオ全体の研究効率が上がったって

みんな言ってたわよ。・・・あたしも助かってるし。」

学術閉鎖都市・アスピオ。さすが技術結集の都市というべきか、技術方面は顕著なのだが

それ以外は言っちゃ悪いがからっきし駄目だった。まず、研究ばかりしていると自分の事に手が

回らない人が非常に多い。食事面なんてまさにそうで、2，3日研究に没頭するあまり

空腹で倒れるなんて珍しくなかったらしい。

ここの住民は食事だけでなく研究以外の物はすべて無駄なものという考えを

持っている人が多いらしくそのせいで色々失うものが多そうだった。

人間としての喜びとか感動とか家族とは無縁そうな生活。自分の世界に没頭しすぎて

自分が人間だって忘れてるんじゃないの？

　これじゃあガリヴァー旅行記のラピュータ人一歩手前じゃん。危ないよその思考回路。

私が所属するギルドはそんなちょっと違う意味で頭が悪い人々を勝手に支援することにした。

研究者達の意見交換の場と称して飲食店を出したのだ。

この街唯一の飲食店だ。・・・まずお前ら食に関心持てよ。

飲食店一軒も無い街なんて在りえないって。

コーヒー片手に白熱した論争が繰り広げられていたり、はたまた料理の美味しさにつられて

人はやってくる。研究一本の独り身にあたたかく愛情溢れたご飯は必要不可欠だ。

空腹で倒れる事が無い分研究効率もぐんと上がる。

ちなみに配達もしている。従業員が家まで訪れ、明らかに食事を取っていないようなら無理にでも

作業をやめさせたりと、ちょっとお節介なこともする飲食店。愛はしっかり籠めてます。

リタも危ない生活習慣の持ち主だったので苦労した。意地っ張りで頑固な子供に

食事させるのがこんなに大変なものだとは思わなかった。子育てする全国のお母さんはすごいよ。

現在ではちゃんと食事も取っているようだ。アスピオを離れる際、他の従業員にちゃんと引継ぎ

したので容赦なくご飯を口に突っ込まれていたことだろう。

うーむ、・・・デレ期到来?

螺旋階段の奥の使われなくなった施設から大量のエアルが噴出していた。

その影響で吐き気、立ちくらみなどの症状が出始めたのにもかかわらず、一行は扉を開いて進む気

らしい。普通は戻って体制を建て直すか、対策を練るのではないだろうか。若さの勢いって怖い。

ナチュラルに旅の仲間に加わっていますが、一人は危ないから一緒に行こうという皆さんの

優しさのおかげです。
このメンバーほのぼのしてて好きだよ。でももっと人を疑うことも覚えないと後が怖いぞ。

噴出すエアルのせいか判断力が鈍って困る。雨に濡れて体は冷えてるから寒気もするし
街を走り回ってくたくたなのだ。私にはソーサラーリングなんて便利なもの持ってないので
岩壁よじ登って民家を転々としたのだ。しかも迷ったので時間もかかり、さすがにくたびれた。
あったかいココアがほしい・・・。

「・・・・ここに、何か文字を入れればいいのかしら。」
「太陽って入れて。太陽って。」
「・・・・なんでそんなの知ってんだ。」
判断力の鈍った頭は早くここから抜け出したいが為にパスワードを口に出したが言い訳なんて

考えていなかった。ユーリの突っ込みで気付いた私は馬鹿だ。頭の回転は全くしていないが

視界はぐるぐる揺れていた。特にさっきのぐるぐる螺旋階段のせいで体調悪化。酔うよね。

帰りはアレを昇らないといけないと思うと頭痛が酷くなった気がした。

ゲームプレイ中にここでつまずき一日中かけてカルボクラム一帯のパスワードメモを捜索して

それでも答えがわからずパソコンで探したりと時間をかけ、とにかくプレイ中で

一番無駄に時間をついやした思い出は忘れられない、なんて言いたくても言えない。

人間、自分で調べて答えを出したものは印象に残りやすいものなのだ。

あと理不尽な思い出も。

「ほれ、パスワード！」

一枚しか持っていないが。「空」と書かれている。

全員から怪しい目で見られてもやましいことなんて何一つしてないのだ。それは胸を張って言える。

私は早く宿に帰ってお風呂に入りたい、着替えたい、あったかいご飯食べたい。

そして扉は開かれる。

「そうだ、もっと暴れろ！ケダモノはケダモノらしく」

お前はロッテンマイヤーさんかよ。

竜使いに邪魔をされるクリント達。どうでもいいけど後の隊員達はどうした。

空からガレキが降ってきたり大きい青いやつ・・・グシオスだっけ。進化（？）したら

やけにかわいくなるやつ、がやってきたりと忙しい。

ユーリ達が戦っているのは見えたが私には戦うだけの体力はもう無

い。

誰か私にライフボトルをー。走馬灯が見えた気がした。

意識がぼんやりと消えていく。

夢の中で桃色の髪を持つ女の子がこっちを向いた。

エステル・・・じゃない。桃色の髪はとても長かった。

笑っていた、怒っていた、むくれていた、泣いていた。

あの子と一緒に過ごした日々。・・・・あの子って誰?

『ステラ』

「え」

すばらしく寒いと思ったら地面が遥か下でした。

何これ私空飛んでるよ。

風圧ではためく長い黒い髪が飛んでいきそうだ。帽子ごと深く押さえる。

胴体を何やら硬いギザギザしたもので挟まれて・・・え、もしかして歯？

私食べられてるんですか！？

ジェットコースター並みのスピードで飛びまくるので酔いそうです。

「私食べても美味しくないですぞぉー」

風の抵抗に負けないように声を張り上げます。風圧で顔が歪むし咳き込むし。

空を飛ぶって意外と大変。昔からの憧れだったのに風圧に負けそうだよ。

相手が相手なので攻撃するのも渋られます。だってこれ、バウルでしょ？

返事は期待していなかったのだが、意外にも返ってきた。

「大丈夫。食べないから」

予想通りの綺麗な声が響く。うわぁ、ぜひ高笑いしてほしい声だ。

中の人ネタだけど。あれよりも美しい高笑いは聞いたことがない。

「私の友達が、心配してたの。貴方のこと。」

友達ってバウルですか。・・・心配って戦ってたエンテレさんじゃなくて私？

「えーと、なんで？」

「さぁ、私には教えてくれないの。」

・・・さいですか。

大物との対決に切迫しているためか、誰も私の行方に気付かなかったらしい。

悲しいわぁー。

その4、たおれた。

ベッドの中で目を開ける。いつの間にか眠ってしまったらしい。

実年齢に対して精神年齢高そうな1人と

実年齢に対して精神年齢低そうな1匹の姿は見えなかった。

運んでもらったお礼まだ言ってなかったのに。

雨風に曝され、体力も奪われ、最近ろくに食事も取ってなかったなーと

言う訳で、風邪引いたみたいです。いや、私昔から車酔いするとその余韻が長く続く

経験があったから、きっとエアル酔いもそんな感じだと思ってたのに違ったみたい。

宿の人が私の症状を見て医者を呼んでくれた。

ヘリオードの宿の一室。窓無し個室。蜘蛛の巣が張る天井を見るのはこの現実

から目を逸らす為だった。

「大丈夫です。すこしの辛抱ですから」

やけに牛乳瓶の底っぽいメガネを掛けたおじさんが、にこやかにささやく。

どうでもいいけど逆光が怖い。おじさんが中ボスに見える罠。

そして私のベッドを取り囲む自称研究生一同。

私、見世物動物ですか、モルモットですか。

「今回の場合、頭痛、発熱。患者は衰弱していますから、栄養剤を注射します。

血管の深さは人それぞれ違いますし、部位によっても違いますから、しっかり触れる場所を確認しましょう。」

メモ片手にふむふむ、ほうほうが木霊する。いいからさっさと終わらせてくれ。

「空気を絶対に含ませない心意気で望んでくださいね。粒状の気泡程度なら

まず問題はありません。どのくらいで致死量に値するかはちょっと実験したこと

ないのでわかりませんが。」

そこで『ふふっ』とか笑うな。・・・心意気の使い方間違ってない？あっさりしてない？命の重さ、軽くない？

「ちなみに失敗すると・・・。残念な事になります。」

「ちょっと待ってください！普通患者の前で恐ろしいこと言いますか！？」

思わず擦れる声を張り上げる。おじさん、いや先生の存在が非常に残念だ。

「いえいえ、やはりその場で聞く方が彼らの身に付きやすいのでつい。

・・・・・大丈夫ですよ。」

先生は牛乳メガネをくいっと上げながらも話を続ける。間が怖いよあんた。

「注射の打ち方、要は慣れです。たくさんの患者さんに私達もまた、育てられるのです。

一度の失敗でもめげずに回を重ねることによって成長していくのです！」

「素晴らしいお言葉です先生！勉強になります！」

自称医者と自称研究生の会話はまだまだ続く。患者の前で失敗って言うな。

普通の診察って１０分くらいで終わるんじゃないの？あれって日本だけなの？

今日はひたすら暇なのか、なんでたった一本の注射打つだけで何時間も居座るの、もう

何もしなくていいから帰ってくれないかな。

人生の中でこれほど緊張したのは生まれて初めて魔物と対峙したとき以来だった。

・・・コ・メディカルって恐ろしい。

どたばた響く足音と共にドアが開く。

「お医者殿！！部下傷を負ってしまい、治療をお願いできませぬか！！」

馬鹿でかい声を張り上げるのは、ルブランさん。

あ、私、この人最大の見せ場逃したかも。ちょっとショック。

連行シーン興味あったのに。部下ってデコボコさんですか。

あまりにもインパクト強しなあだ名のせいで本名忘れたけど。

医者軍団は次の獲物・・・もとい患者のもとへ去っていった。

ちなみに私はぐっすり一晩眠って翌日には全快。

やっぱ医者にみてもらうのは治りが早くていいな。あの軍団は正直勘弁してほしいけど。

眠気が抜け切らず、ベッドでぼけーっとしていると、騒音と共に地面が揺れた。

地震？震度１，２レベルだったらこちとら常連なんで。

近くの部屋の住民はドアを乱暴に開け、数人の駆け抜ける音が響く。

それから数分後、どたばた響く足音と共にドアが開く。

これ何回目？ここの人達って常に走ってばっかりなの？

『廊下は走るな』はここでは通用しないんですか。

ちらりとドアの方向に目をやると、顔を真っ青にした宿の店主。

「お客様！お逃げください！ば、ばくっ、爆発がああぁっ！！」

・・・爆発？

その4、たおれた。（後書き）

ローウェルさん一行が出て来ないという罠。
ローウェルさん一行の活躍が無いという罠。
あれおかしいな、愛は溢れてるのに。
ストーリー上のイベント、注意しないとシナリオそのまんまの読み上げになってしまいそうな罠。私文才無いしね（涙）
というよりシナリオブック持ってないし、話の中盤あんまり覚えていないという罠。
　こんなへたっぴな小説をお気に入りに入れてくれた方、ありがとうございます！！！
初めての投稿なので、めちゃめちゃ感激してますｖｖｖ

その5、爆発の結末

爆発？してたようなしてなかったような・・・。

ずいぶんご無沙汰になってしまった遠い記憶を呼び覚まそうとするが

うまくいかない。でもそれは世間一般の普通。

広場の魔導器の所に近づくにつれて暖かい風が頬をなでる。

魔導器は本来の色を忘れたかのように夕焼け色に輝いていた。

わざわざ危険になると赤くなるとか、わかりやすいね。

見知った少女は必死にパネルと格闘していた。

少女はやって来た私に目もくれず一声。

「邪魔しないで！」

「邪魔しない。本格的に爆発したら抱えて逃げるからね。」

急に魔導器が耳障りな音を出し始め、私の緊張も高まる。

怪しく光っている本体にヒビのひとつでも入ったら即撤退だ。

危なくなったらすぐに俵担ぎでダッシュします。

リタがデータに集中しているように、私も魔導器に注意を注ぎまくっていた。

だって一つ間違えたら爆発に巻き込まれて・・・・考えたくもない。

ここは『記憶術式』なるものが無い「死んだら終わり」の世界なのだから。

「リタ！大丈夫！！」

エステルもやってきた。え、抱えて逃げる荷物が２つに・・・。

これ以上誰も寄ってこないでくれ。私の腕は２つまでだ。

それよりも、誰かお姫様を止める人はいなかったのだろうか。

よくよく見ると詰め所側の道に苦い顔のユーリとフレンの姿が。

あれ？なんで来ないのだろうか。

操作盤を叩くリタの目の色が変わる。

「なにこれ・・・術式が変わった。エアルが収まってく・・・。」

エステルの影響だろうか、あの子、ほんのり光ってるけど。

まだ私は考えていた。爆発ってしたっけ、してたっけ。

「よし、できた・・・。」

不意に魔導器の光が不規則に輝く。

とっさにエステルを抱え、リタの腰の帯を引っつかんで飛びのいた。

爆発音と爆風が襲うが直撃はしてない。

まるで台風の実況中継みたいに体を襲う強風。

ずりずりと靴底が減る音を聞きながら足を踏ん張る。まるでムーンウォーク状態。

爆風に煽られ私達はどんどん魔導器から遠ざかり・・・。

「うあ。」

当然、すごい勢いで背中から壁にぶつかった。一瞬息が詰まる。

そして私を押しつぶす少女二人。背中の骨がぎしりと

音を立てた気がした。でも二人はちゃんと守れた、と思う。

私偉い。でも地味に痛い。

「ステラ！口から血がっっ！」

うっかり唇かんだことが災いして、めちゃくちゃ心配されました。

・・・それほどでもないよ？

咳き込んでだらだら口元から血を流しながら言っても説得力に欠けたみたい。

わたわたしている2人がとても可愛いかったです。

宿の大部屋、見晴らしの良い部屋になぜか運ばれ、ユーリに「勝手にいなくなるな」

と説教されて、エステルの治癒術を受けた。・・・正座は正直痺れて大変だった。

さすが治癒術。唇の怪我も背中の痛みもついでに足のしびれもじんわり癒される。

ちらりと見える彼女の魔導器。発動時の光は見えなかった。

「そんなに術使いすぎると疲れるよ。大丈夫だからさ。」

自然治癒も大切よー。

エステルはまだまだ術を使う気満々だったので。気を逸らそうと

ポケットを探り飴玉を取り出し、エステルとリタに渡す。

「これ、うちのギルドの新作。」

「ステラさん、ギルド所属なんですか？」

「そうそう。人気なんだよ、このお菓子シリーズ。

疲れた時には甘いものが一番！あと呼び捨てでいいからね、エステル。」

エステリーゼ譲が幸せそうに微笑む。そのあだ名、心底気に入っているらしい。

興味津々で眺めるユーリにも一つ渡す。甘党だよね、確か。

「うまい」

と言いながらバリバリ齧る音が聞こえます。あー、ガム渡せばよかったかな。

「とっても綺麗・・・。食べるの、ちょっと勿体無いです。」

日の光で輝く姿に感動したらしく、なかなか口に運ばない。・・・融けるよ。

「またくだらないものばかり作って・・・」

そう言いながらも食べてる顔、緩んでますよ。目じり下がって幸せそうですよ。

なんだかほのぼのしていたら、カロルが部屋に入ってきた。

「あー！みんなずるいよ！ボクの分、無いの？」

予想通りの反応をくれる少年に、笑みがこぼれた。

なんて微笑ましい光景なんだろう。

夜が更けてから気付く。あれ？

・・・竜使い参上するんじゃなかったっけ？

その6、あの子にサフランライスを。

記憶と違ったことが起きてもそりゃあリアルは違うんだよむしろ違ってない

方が異常なんだよ。

結局ダングレストまでみんなと一緒に行けることになりました。

行き先一緒だしね。おばーさんにアルバム届けなきゃだしね。

すっかり忘れてたけどさ。無理無いよね、この面子が隣にいたら

きっとどんなことでも即座に忘れる自信がある。

ヘリオードからダングレスト

私達の足だと、だいたい一日くらいだろうか。

ゲーム内ではホーリィボトル使用で3分もかからない距離だったのに

やけに道が遠く感じる。

旅人や行商人は、余裕があれば道に生えてくるしつこい草々を刈り取る。

それがこの世界共通マナー。

次に訪れる人々が道に迷わないようにするのだ。完璧な地図を持つ者なんて

世界人口の半数にも満たない。

人々の足、または馬の足で地面をしっかり踏み固め、そして道を生んでいく。

たしか戦闘ボイスで「私たちが道を作る」とか言っていたが、まさにその通り。

魔物の縄張りをできるだけ避けて築いたこの道は人々の命綱だ。

私達も多少は貢献した。途中で道を間違えて行き止まりの獣道を何本か

作ってしまったが、それもご愛嬌。木々が生い茂る中、

迷うなという方が間違ってる。

「次来る奴等の泣き顔が目に見えるな。」

ちょっと皮肉った笑いを貼り付けながら語るユーリさんを華麗に無視しました。

道なんて間違える訳ないじゃん私この辺りよく通るし、と啖呵切って先頭に立った私の真横で笑わないでほしい。

星が夜を照らし出したころ、夕飯のサンドイッチをかじりながらみんなで天体観測をした。

エステルがやけに熱を込めながら星の名前や由来などを語ってくれた。

彼女いわく、今までとは星の輝きが違って見えるらしい。

お城の周り、明るいもんね。貴族街はいつも明かりを絶やさない。

時々リタが補足したりとまるでどこかの授業だ。

ユーリは欠伸を噛み殺していた。やっぱり座学は苦手らしい。

身振り手振りで説明してくれた為、サンドイッチの具が飛んでいった。

あらあら、腕ぶん回すからだよ。テンション上がってるのはわかるけど。

今日は豪華なチキンサンドだったので、つまりメインのチキンが空に舞う。

ちょっと涙目のエステル。ほんわかとしたあなたは癒しだ。

「本当に、今までの世界とは違って見えます。」

それは街灯や魔導器特有の光も無い満点の星空が見えたからなのか

それは焚き火を囲みながら思いを分かち合う友人がいるからなのか

エステルだけが持つ答え。

私は星が綺麗だな、と思うばかりで大して星座に興味が無かったので

いい勉強になりました。カロルと一緒にふむふむ感心してました。

ラピードとユーリのシンクロ具合が半端ないです。

寸分たがわず同時に欠伸とかありえないです。

（本日の日記より）

明日の準備（剣の素振り、ラピードへのアタック、研究経過を書き留める、等）

が繰り広げられている間（あ、ラピード嫌がってる）

私は小さな焚き火にあたりながら日記を書く。

この国の言葉＋時々日本語なので、ある意味暗号気味な日記だ。

人に見せるものじゃないし、そもそもこれからのストーリーや、前世の記憶、

主にストーリーよりも日本生活重視で覚えている限り書き殴っているので

意味不明じゃないと困る。

忘れたくないことなんて山ほどあるのだ。ゲームのストーリーなんてはっきり言えばどうでもいい。知っていたってなるようになるのだ、多分。

それより昔の自分が何を考えどうやって

生きてきたか中途半端に忘れてしまう方が辛かった。
いっそスパーンと前世の思い出全部消えてくれた方がすっきりする。
病院送りにされそうで誰にも相談できない分、不安は書いて解消する。

「ねぇ、ステラ。」
いつの間にか隣に座っていたカロルが声をかける。
「ん？なに？」
「ステラはさ、どうやって強くなったの？」
「・・・はい？」

人がシリアスにふけっていた中、いきなり人生相談がきました。ガツンと直球。
相談者カロル君はとっても深刻な顔で眉間に皺を寄せていた。

「ボク、自分でギルドを作りたいんだ。ユーリを誘ったんだけど、『考えておく』って言ってくれて。だから、ユーリに負けないように少しでも強くなっておきたいんだ。」

次期ボスとしてしっかり考えているらしい。素直に人の意見を聞こうとする

ところはすごいと思う。

将来、大物になって部下に慕われる超すごいボスになれるとお姉さん信じてる。

しかし、聞いた相手が悪かった。

「えっとねぇ、私の参考にならないよ？」

前置きひとつしてから言葉を続ける。

「昔、私が小さい頃にハーブ栽培が趣味の知り合いがいて、

ほぼ毎日ハーブで何か料理して食べてたんだ。

ドーピングってやつ？死ぬ一歩手前の経験の中での成長もあるにはあるけど

どう強くなったかーって言われると、基本はそれなんだよね。」

レッドバジルティーはすこぶる苦かった。砂糖を山盛り５．６杯入れて飲んだのは

今ではいい思い出・・・な訳がない。甘さと苦さが絶妙なハーモニーだった。

「ねぇねぇ、ボクも頼んだらその人にハーブ分けてもらえたり・・・しない？」

「無理無理。場所が場所だし・・・あんまり会いたくないんだよね、その知り合いに。」

即座に否定した。私、まだ死にたくないです。思わず鳥肌が。

今会ったら大変なことになりそう。目からビームとかあの人ならできそうだ。

赤い目ギラギラさせて迫られそうで怖い。

「いいんだ、別に言ってみただけだし！冗談だよ、冗談！」

と、遠い目をするこちらを慌てて気遣ってくれる１２歳。

私の方が明らかに年上のはずなのに、なんて気が利く１２歳。

将来、大物になって以下略。

「よし！ハーブは少し持ってるから。今度ハンバーグに入れてあげよう！」

事を成すにはまず一歩踏み出さなくてはならないのだ。

千里の道も一歩からって誰かが言っていたような気がするようなしないような！

よし、サフランライスを毎日作ろう！君には俊敏さが必要だ！

明日はきっと夕焼けの街へ。

その7、憑いてる人。

今日はどよんだ曇り空。昨日の満天の夜空の方がこの大陸にとっては珍しいことだったんだけど。いつもじめじめしていて、洗濯物の乾きが遅い。

ダングレストならなおさらだ。何が原因かは知らないが、ずっと夕焼け空だし。

さっそく依頼人にアルバムを届けるので、この面白パーティーに別れを告げると

「ちょっと待ってまって！せめてユニオンまでいいから一緒に来て・・・！」

そう、ダングレスト出身の少年カロル君はやたらとお節介な人に絡まれ易い。

ビビリなのにビビリなりに強がるものだから、余計に傍で見ている

人達は面白がる。

きっと、そんな情けない姿を見られたくないが為の行動だと思う。

けれどこのメンバーはカロルの事をある程度は理解しているし、

これ以上カロルの印象変わらないんじゃないかな、と思うのだが。

カロルに服の端を掴まれ必死に頼まれた。

男達からからかわれる原因の一つは、そういった世渡り上手なところを

羨んでる人もいるからだと見た。

「おや、ナンの姿が見えないな？ついに見放されちゃったか、あはははっ！」

「ち、違う！いつもしつこいから、ボクがあいつから逃げてるの！」

ほら、カロル君有名人だから絡まれる。

せっかく私を盾にしながら進んでいたのにやっぱり見つかってしまった。

前いたギルドだか知らないけれど、見覚えの無い男達が

カロルにちょっかい出していた。お前ら、今後が怖いぞ。

こういうのは無視するに限るのに持ち前の若さ故か、カロルは真っ赤な顔して

躍起になって応戦する。大声で叫ぶので耳が痛くなる。

「カロルの友達か？相手は選んだ方がいいぜ？」

「あなた方の品位を疑います」

「あんた、言うわね。ま、でも同感」

フォローを入れる我等が一行。

このメンバー、やさしいなぁ。カロルもちょっと感極まっている。

よかったねぇ、大切な仲間ができて。

「へっ、朧月の譲ちゃん以外にもまた庇ってもらえるオトモダチができたか」

「朧月？」

「私のギルド」

エステルが首をかしげていたので口を挟む。説明してなかったね、そういえば。

カンカンカンカン

警鐘が響く。魔物が来たのだ。

「やべ……また、来やがった……」

そそくさと去っていく男達を見送る。顔は覚えた。

機会があったら個人的に嫌がらせしてやる。

「警鐘……魔物が来たんだ」

小刻みに大地が震えて、まるで地震のようだ。地響きがこちらにまで伝わる。

「この足音の主が来るのか。こりゃ大群だな」

「ま、でも心配いらないよ。最近やけに多いけど

ここの結界は丈夫で、破られたこともないしね」

ユーリの声に、カロルが得意げに答える。

「カロル、だめだよそんなフラグ立てちゃ。」

「え、フラグってなに」

この子言っちゃったよ。ため息混じりに冗談を吐いたとたんに

結界の光が不規則になり、きゅいんと情けない音を立てて消えた。

「結界が、消えた……？」

「ほれ、カロル君があんなこと言ったから・・・。」

まぁ、起こることだったとは思うけど、タイミングが良すぎる。

「ええっボクのせいじゃないよ！」

なぜかみんなの視線がユーリに行く。視線の先の彼は目を丸くした。

「あんた、やっぱり何か憑いてんのよ！」

リタがびしっと指をユーリに向けて、きつい一言を浴びせる。

人を指差しちゃいけませんって習わないのだろうか、この世界は。

ユーリも身に覚えがあるのか「かもな」と眉をひそめて呟く。

まぁ主人公であるが故の葛藤ってやつだ。・・・逆にユーリが動かなければ

世界は平和に終わるのだろうか。いやそれは無い。魔導器がある限り世界の破滅とは隣合わせだ。

「ユーリ、魔物を止めに行きましょう！」

エステルが急かし、一同は魔物の討伐に出るのであった・・・。

・・・パーティーから抜けるに抜けれない状態になってしまった。

その8、緑のアイツと聖なる剣。（前書き）

先に言います。なんか色々とごめんなさい。。。

その8、緑のアイツと聖なる剣。

「うわーんっ！！おれ、悪ぃ事してねーのに！！」

制御版の傍に、どでかいタンコブを作った少年が号泣している。

リタが心底不機嫌な顔をしながら制御版をいじる。

いつもなら魔導器に心を砕き、話しかけたりする光景が見られるが、

お隣の騒音の所為で心の余裕が無いらしい。

明らかに背中が語っている。「こいつウザイ。どっか連れて行け」

と。

「・・・本の角は痛いよね、角は」

どこか遠くを眺めながらカロルが呟いた。経験者は語る。

ダングレスト東。結界魔導器管理制御版まで魔物や人（黒フード軍団）

を蹴散らして、着いたところには、少年が一人。

喧騒に巻き込まれたのか、体中泥に塗れた姿で必死に魔導器の不調を調べていた。

当然、そのパネルを触る手も泥だらけな訳で。

「そんな汚い手で、その子に触ってんじゃないわよー！！！」

リタが悲鳴にも聞こえる声を上げ、善良な少年を本で殴りつけた。

ああ、あんな分厚い『ストームブリンガー』で殴った。しかも角で。

本が凶悪な光を放つのを見て、あれは歴（れっき）とした技だと知る。

たしかζ＝δτ（ωρ）〔ラプラス〕。

穏やかな生き物を彷彿させる名前だが本の角攻撃。

あの技、奥儀だよね、めちゃ痛そう。

とりあえず号泣している少年を制御版から遠ざける。

「あ！また術式が変わった！何これ、何に反応してるの・・・・。」

天才少女はまた新しい発見があったらしく、自分の世界に没頭している。

かちゃかちゃと目にも留まらぬ速さで制御版を叩く姿に脱帽。

天才ってすごい。何やってるか全く理解できないけどすごい。

リタが魔導器にかかりっきりになっている間に自己紹介。

「この子、朧月のメンバーで、アクスィパイタージェンティ君って

言いまーす。」

「「名前長っ！」」

「好きでこんな名前になったんじゃねぇやい！」

そう、この子名前がすこぶる長い。本人も自覚はあるらしく、

気まずそうに帽子ごしの綺麗な金髪頭をがしがしとかく。

そう、当たり前だけど子は名前を選べないのだ。当事者なのに。

「略して、リンク君！」

「どこをどう略すんだ？それ。」

あだ名つけるのが大得意のユーリが突っ込む。

「・・・わかる人にはわかるんだよ」

最初見た時はお前世界違うだろ、ニン〇ンドウに喧嘩売ってるのかと

思ったその格好。

全身緑の服に身を包み、ナイトキャップのような緑の帽子をかぶった少年。

耳がとがっているのはクリティア族とのハーフだからしい。

そしてその背から見える独特な青の鞘と柄は

伝説の退魔の力を謳う剣そっくりだ。しかも盾に彫られた模様が三つ鱗紋。

これは家に伝わる伝統衣装と装具なんだ、と力説された日の晩は独りで泣いた。

そんなことはどうでもいいが、その子に将来もしガノンと名のつく魔物か、あやしいおじさんが現れた際はお前かお前の祖先が必ず責任持って

倒せと意味わからん約束を必死でさせた。

こんな少年がいる所為でハイラル最強で絶対死ななさそうな大魔王が降臨なさったら

シャレにならない。悪意がある分将来出てくる星喰みよりも危ないんじゃないだろうか。

封印封印の連続で多分一回も死んだことが無いラスボスに思いを馳

せる。

弱点はたしか尻尾だ。魔術って効くのだろうか。歴代主人公達は魔法らしきものを

使ってるイメージが無いため、対抗武器が光の矢とマスターソードしか思いつかない。

いや尻尾ぶち切ったらいいんじゃ、でも普通の武器が効くかが問題で・・・。

光属性の技は効くような気がする、光って名前的に。

・・・こんなことを真剣に考える私って馬鹿なのだろうか。

外の魔物をフレン小隊長一行が退治している間、ユーリ一行はユニオンへ行き、

私はみんなと分かれ、本来の仕事に取り掛かる。

ダングレストの一角、賑やかな通りの曲がりくねった裏道を進むと一軒の家がある。

「おばーちゃーん。アルバム取って来ましたよ。」

ドアを開けると年寄りにしては眼光鋭い一人の老婆が私を出迎えた。
細くて皺が目立つ指がやさしくページをめくる。

「お、懐かしいねぇ、これはウチの息子がお前さんを口説いてた時だ。」

「本当だ。いつだっけねぇ。あ、ここ、旦那さん写ってる。」

けらけら笑いながらも話はそこそこに。

「ありがとよ、ステラ。じゃあ正式に、あの剣はアンタのモンだ。」

アルバムを手にして目じりの皺が深くなる。彼女なりに微笑んでいるのだろう。

「・・・・・あれ盗品だよね。明らかに特徴ありすぎて使えない、というか捕まりそう。」

「私の最後の獲物だ。大切にしておくれよ。」

獲物・・・おばあちゃん最後の大活劇だったらしい。

ちなみにその前はカルボクラムの真新しい階段をことごとく爆破した。

せっかく手に入れた町に機材を運ぶ階段を切り出したのに、一夜にして壊される悲劇。

しばらく経ってから街は原因不明の崩壊を起こしたが、被害が酷いのは言うまでも無く

階段である。

あれは情けを掛けてやったんだ。あの岩層を考えずに切り出した階段など

幾年も持たなかった、死人でも出たら後味悪いだろう？

語られても確かめる術は無い。というか、まずアルバム奪取すればよかったんじゃ。

おばあちゃんから貰った剣をまじまじと見つめた。

ふっくらとした肌、流れるような長い髪、睫毛の一本一本まで細かい。

真白い女神の彫刻を宿す聖なる剣はランプの光を受けて神々しく輝いていた。

世界は同じようで無数にあるのだと思う。

私がいる世界、私がいない世界。

誰かがいる世界、誰かがいない世界。

知ってはいけない世界、知らなくてもいい世界。

誰がどう思うかも自由でどう動くのも自由。

すべてはすべての思いと行動で紡がれる物語なのだから。

ゲームとこの世界は少しずつ違う。

ほら、今日も。

この祈りの剣ラグクエリオンがこの手にある限り、

ソードマスターイベントは無くなったということだろう。

その8、緑のアイツと聖なる剣。（後書き）

・・・・・・なんか、魔が差しました・・・。
ゼルダのＣＭ見てきゃーきゃー言ってたのがいけなかったのだろうか。
なぜかこんなことに。
さすがにわざわざ弱点つけて挑んでくるあのラスボスは登場しませんよ？
世界観がどうしようもなくなるので。
ああ、行き当たりばったりで書いてるからこうなるのだろうか。。。

その9、美人さんは憎めない。

時々変な夢を見る。

小さい女の子が私のいる所へ走ってくるのだ。

その子は私の気を引こうと頑張る。

今日の朝日は綺麗だったとか、

散歩してたらかわいい白猫と会えたとか、

お母様に勉強褒めてもらえたの、とか。

私の反応を窺う様に、時々会話は止まる。

私は何故かその子の方を向くことは無かったし、

声を掛けることもなかった。

私は夢の中の私に「薄情だな、なんか会話繋ぎなよ」と思うがどうにもならない。

夢の中の私の視線はいつまでも空を辿っていた。

少女は立ち上がり、私に一言かけて去っていく。

「明日、また、来るから。」

私はまだ、青い空を見ていた。

今日は何日かぶりに太陽が顔を出した。

ユーリ達はケーブモックの調査に出かけている。

私は遠慮しておいた。虫、苦手なんで。

代わりに虫除けの携帯香炉を渡しておいた。

この大陸は、いつでも少しじめっとした空気が覆う。まるで梅雨時の日本だ。

虫や植物はその影響もあり、とても残念なことに、他の大陸よりも元気がいい。

ケーブモックは特に虫がデカイ。エアルクレーネの影響だろうか。

ホーリィボトルに敵いはしないが、小さい虫なら香炉に寄り付かないだろう。

カロルが喜びを隠しながら自分の腰に香炉をくくり着けていた。同士よ、頑張れ。

ドンに後で会いに行くと言っていたし、その後にでも、

香炉を返しに宿まで来てくれることだろう。

ギルドの仕事は当分お休みします。有給申請ってやつね。

だって世界の危機が迫ってるのに落ち着いて仕事できるかっての。

唯でさえ若気の至りで色々介入してしまった所もあるのだ。

もしかしたら軌道修正が必要かもしれないじゃないか。何かあったら困る。

フレン小隊は結界の外に近づく魔物達を退治するのに忙しい。
ギルドの荒くれ者達も騎士には負けられん、と意味無い闘争心を燃やしながら
ばったばったと魔物を狩る。
結界の外と言っても魔物はうじゃうじゃ常にいるものなので、
通常くらいの量に戻ったのだが、引き際を知らないのか
何日も掛けて2つの勢力は競い合う。
もうそろそろ止めないと、魔物ですら住み着けない地域になりそうで怖い。
この人達は生態系という言葉を知っているのかと問いたくなる。
そんなこんなで争いながらも男同士の暑苦しい友情が芽生えてきたらしく、
夜の酒場では騎士とギルド員が一緒になり飲み比べを行う姿も見かけるようになった。
日中張り切っている群れの辺りには魔術使用後のクレーターの数々。
・・・辺り一帯、月面化しそうだ。

ぶらぶらとダングレストの大通りを歩いていると、なにやら見慣れた姿が

目に入る。

あからさまにふらつきながら歩くどこぞの誰かさん。

くすんだ赤い服を着て真っ白なふわふわの髪を持った誰かさん。

・・・ああ。

私はその頼りない歩みを進める誰かさんの腕を掴んでぐいぐい歩き出す。

相手は特に反応することもなく素直について来る。

どんなに強くても、どんなに神秘的でも、どんなに完璧そうでも

人間は当然、欠点も持ち合わせる生き物なのだ。

向かう先は酒場兼お食事処。

誰かさん・・・もといデュークさんにご飯を奢る。

これは今に始まったことではない。

何年前かは忘れたが、森の中で擦り切れた服を身に纏い

栄養失調で倒れているデュークさんを発見して

近くの宿屋に連れて行ったのが最初だった気がする。

地上で会った初めてのキャラがラスボス、しかも弱ってる所だったなんて、

人生何が訪れるのかわかったもんじゃない。

さらに、この人の欠点を発見した。

大貴族出身のお坊ちゃんだったが故に、当たり前の一般常識に疎すぎる。

たとえば料理とか、裁縫とか、料理とか。

果物だけを食べる日もあったらしい。

肉や魚を獲っても捌き方を知らず、当時はずいぶん苦労していたようだ。

そうだよね、貴族はサバイバルしなくても生きていける生き物だったからね。

服が破けても自分で治せないというのも当たり前。
この人の人生の中に縫い針を持った経験は無いのだ。へっ、ブルジョアめ。
人間と関わらない事を決意した人としては致命的過ぎる。
ターザンになるなら話は別だが、この人はそんなことしないだろう。
プライド的に。

そして何ヶ月かごとに私はデュークさんにご飯を奢り、服の破れた所などを
直したりと、甲斐甲斐しく世話を焼く習慣ができた。
あ、今回も膝擦り切れてる。また転んだのか。
そしてぽつりぽつりと世界について語りまくるデュークさん。
話相手がいないのか、私に会った時はすぐさま語りだす。
人嫌いとか言っておいて、やっぱり誰かと会話できなくて寂しがっているらしい。
よくわからない話を聞きながら適当に相槌を打つ。別に意見を求められているわけでも
なく、誰かに話して自分の考えをまとめたいだけみたいだから特に

問題無い。

そんなのんきな事をしている時に、ユーリ一行は仲間を増やし帰って来て、

ドンと面会を果たしていたらしい。

そして、走れメロスイベントがすでに始まっていたと知ったのは、

デュークさんが街を出て行った後、私が頼んだデザートが運ばれてきた後、

酒場兼お食事処『天を射る重星』にユーリ達が押しかけてきた後だった。

「ほら、アンタもユニオンの一員なんでしょ！一緒に行くわよ！」

「ちょっと待って、リタ、痛い痛い！私のアイススピリッツパフェがっっ！」

「あたし達が苦労してる時にそんな物食べられたら腹立つのよ！もう！」

リタが説明、および説得のちに八つ当たりをしながら

私の腕をぐいぐい引っ張って連れて行く。

え、私のパフェまだ残ってる、と思いながらテーブルの方を見れば、私が半分ほど

食べていたはずのアイススピリッツパフェは涼しげな器から消えていた。

あれ？

「ほら、さっさと行くぞ。」

何やら当たり前のように肩にぽんと手を置きながら一行の保護者、ユーリ青年は

歩き出す。

そのほっぺたには生クリーム。

リタと私の心は一つになりました。

「「・・・・・この甘党がぁぁっ！！！」」

パーティー1，2を争う美人さんに私とリタ譲のアッパーカットが入りました。

初めての連携技です。ユーリ青年はいきなりの打撃でダウンです。

あわあわとエステル譲がユーリに治癒術をかけ、その光景を見てカロル少年とラピードが

やけに遠い目で見てました。

「ちょっとぉ～、おっさんの話誰も聞いてないでしょ～！」

と、その後ろで35歳児が拗ねてました。

様子から察するに、地下水道にレッツゴーするらしいです。

その9、美人さんは憎めない。（後書き）

なんでだろう、なんでこんなに展開が遅いんだろう。
ダングレストからなかなか離れられない罠。
早く他の地域に行きたい・・・！
そしてオリジナル主人公の名前が出ない・・・（涙）

その１０、ようやく知った世界状況

「どこまでも真っ暗です。」

こんな溝臭いところでも初めて来たからって感動できるエステルはすごいと思います。

エステルの瞳が光照魔導器（ルクスブラスティア）に照らされて一層輝いていた。

ゲームでは所々でエアルの補給が必要だったけれど、今回はそんな必要無し。

満足な明かりが無いと理解した時点で、カウンターに戻り、マスターから

光照魔導器（ルクスブラスティア）を借りてみた。

懐中電灯よりも遥かに明るい。まるでステージのスポットライト。

いつまでも光るし、敵は来ないしで満足です。

こんな刺激臭漂う場所に長居したくないので、口と鼻をハンカチで押さえて足を速める。

地面は絶えずぬめぬめしていて、足を滑らせやすいし、鼻が曲がる勢いの腐臭で

なぜだか頭が痛くなる。

ばっちゃーんと水しぶきと共に悲鳴が上がる。

あ、誰か落ちた。

うう、と情けない声を上げながらも私達の後に続くおっさん、いや、レイヴンさん。

その服はびしょびしょで、ぴちょんぴちょんと雫が滴り落ちる音が響く。

うわ、かわいそうだな、と思っていると目が合った。

「あ、まだ自己紹介してなかったよね、俺様レイヴン。よろしく・・・ってあだっ！」

レイヴンさんは愛想よく笑って手を差し伸べていたのに、何がいけなかったのか

ユーリの鞘が顔面にクリティカルヒット。足が滑り、もう一度水面とご対面。

「ちょっと青年、何すんのっ！！」

「おっさん、臭いから俺たちの半径３ｍ範囲には近づくなよ」

「むしろ視界から消えてほしいんだけど」

ユーリとリタの冷ややかな皮肉っぷりが怖い。

「エステル、この3人、なんで仲悪いの？」

「ちょっと色々あったんです」

「そしてカロル君のフォローが入らない理由は？」

「カロル、虫が苦手なのにレイヴンが・・・」

会話を濁したが、なんとなく続きがわかるので良しとしよう。

カロルが何故静かにレイヴンを見ているかわかっただけで良しとしよう。

・・・みんなこんなに仲悪かったっけ？

まあ、時間が解決してくれるだろうから良しとしよう。

「酷っ！二人とも酷いっ」

それまで被害を被るのはこの人だけだから、まあ良しとしよう。

「我らの盾は友のため。我らの命は皆のため、ここに古き誓いを新たにす」

「ねえ……これって『ユニオン誓約』じゃない？」

そう、地下に彫られた、お世辞にも上手い字とは言えなかったが、そこにあったのは

この街に住む戦士たちの誓。

たしか、お互い助け合っていきましょうみたいな事が書かれていた、はず。

レイヴンさんがご丁寧に説明を始める。観光ガイドさんみたいですね。

結果分かったこと：ドンはやっぱりすごい人。

「ここ……アイフリードって書いてあります」

「ああ、あの大悪党って噂の海賊王か」

え、反応しちゃうの、アイフリードで。

「・・・・・・みんなもしかして、パティって女の子に・・・会った？」

「ケーブモックで会ったよ。なに、もしかして、知り合い？」

「アイフリードのお宝探して回ってるらしいな。まぁコレ知ってるかは

わかんねぇけど。面白いもんが見れたが、今はバルボスだ。そろそろ行こうぜ」

・・・・・・・・・。

「ステラっ！？どうしたんです？気分でも悪いんです？」

「・・・ななな、なんで泣いてんのよアンタ！！」

「いやなんでも、なんでもないから。・・・先行こうか。」

へー、前から常々考えてたんだけど、ＰＳ３、ＰＳ３なんだ。この世界。

追加要素満載って遠い昔聞いてショックだったよ。金銭的に。

・・・・追加要素、望鏡の墓所・・・・い、行くんでしょうか、この人達。

私、行きたくないんだけど・・・・！！

精神的に疲れた私はバルボス達が佇むドアの前で、見張り役を買って出た。

少人数で乗り込んだ上に挟み撃ちされたらどうしようもないからだ。

きっともう少ししたらセリヌンティウスを助けにメロスが・・・いや、

ユーリを助けにフレンがやってくるのだろう。

熱い友情でも確かめ合うがいいさ。

私はメガネ磨きながら一人いじけてるからさっっ！

その１０、ようやく知った世界状況（後書き）

・・・・話を丁寧に書こうと思ったら、なんか酷く展開が遅い。。。こんなはずじゃなかったのにぃっ！

その11、その搭、突入一歩手前

時々変な夢を見る。

小さい女の子が私のいる所へ走ってくるのだ。

その子は私の気を引こうと頑張る。

今日の空は虹が出て素敵だったね、とか

散歩してたら仲悪い友達と会って喧嘩したの、とか

実は勉強、嫌いになっちゃった、とか

私の反応を窺う様に、時々会話は止まる。

その子は私の前に回りこんで視線を合わせてきた。

私の声はとうとう聞けず終いだった。

私は夢の中の私に「だからさ、会話繋ぎなよ」と思うがどうにもならない。

夢の中の私の視線はいつまでも空を辿っていた。

少女は立ち上がり、私に一言かけて去っていく。

「明日、また、来るね。」

少女は、ピンクの髪を翻した。

今、私は砂浜をざっくざっくと歩いてます。

走れフレンイベントはもう終わったのだよ。

ユーリは「ちゃんと歯ぁ磨けよ」とか、保護者の鏡のようなことを言いながらも嬉々として竜に乗って行ってしまったらしい。

そしてここ重要。

私、おいていかれました。

私はしっかりドアの前でお留守番してましたよ?

数分後、追っ手がやってきた。

立ち向かうべき敵が知り合いだったという点が双方にとっての最大の汚点だった。

そして互いに平和的解決を望んだのも後から考えるとそこから何かが間違っていた。

ギルド同士の喧嘩はご法度、というのもあるが、仲良い人達で斬り合いとか

さすがにできない。甘いといわれようができないものはできない。

そして一階の酒場で行われるのは

「じゃんけんぽんで飲み比べ」

負けた方が酒を煽る。

その繰り返しで酔い潰れた方が負けというシンプルなルールだ。

「さいしょはグー」の掛け声は以外にも無かった。ああそうか、この世界には

あの芸能人はいないのだからそんな掛け声の存在すらないのだ。

ちょっとしんみりしつつも頬を叩いて気合を入れる。

大丈夫！私じゃんけん強いから！

相手も思っていた。

大丈夫！酒には俺達強いから！と。

なんだよ勝手に連れてきた癖に勝手においていくのかこの人達は。

しかも置手紙に「先にガスファロストに乗り込んでるから」ときた。

何、「先に」って何。追いかけないといけないのか、私。

ご丁寧にカロル君お手製地図まで添えてあった。さすが地図っ子。

文はレイヴンさんだろう。

オネエ言葉に惑わされがちだが、さりげなく置いて行った仲間のフォロー入ってたり

酔いつぶれた私を気遣う文面が入ってたり。

そしてそんな中でも簡潔に要点をまとめて書いてあるのが何気にクオリティ高し。

この人始末書とか報告書とか読書感想文とか書くの上手いんだろうなぁと思わせる。

こんな細かい気遣いできるんならこの文面の態度を少しは外に出したらいいのにと

切に思う。だってあのパーティーの認識「うさんくさいおっさん」だよ？

よし、このできる人っぷりがにじみ出る手紙を後でみんなに見せてやろう。

特に最後の一文でテンション上がった。

「わんこ、心配そうにちらちら見てたわよ。」

うわ、嬉しい。でも飲んだくれを特に心配してるのは人間以外なんですねわかります。

・・・・レイヴンさんこんな細かい手紙書くんならこの文面の態度を（以下省略）

砂を踏みしめるときゅいきゅいと砂が鳴く。

この状態、昔住んでいた世界ではずいぶん珍しいことなのだが、この世界の砂浜は

大抵きゅいきゅい鳴っている。

それだけこの世界は綺麗というか自然のままというかそれが当たり前というか。

砂浜を踏みしめながら、この世界のことを案外嫌っていない自分を知る。

先に行ってると言われたが、具体的にどこまで進んでいるのだろう。
ガスファロストにたどり着いたが、外に人気は無い。

あー、これは昇らなきゃいけないのだろうか。
この場で待っていたくなることこの上ないのだが。

「こんなところで何をしている。」

聞き覚えのある声がしたと思ったら、すぐ隣にデュークさんがおりました。
思わず数歩後ずさる。

「ひいっ！いきなり出てこないでよデュークさん、座敷わらしじゃないんだからさぁ！」

気配消して悠然と隣に立たれるとかマジ怖い。

この人本当に人間なのだろうか。

因みに今日はしっかりと大地を踏みしめ格好良く立っております。

餓死手前の状態で合うことが多かったから忘れてたけど、

この人めちゃくちゃ美人さんだったことに改めて気付く。

「バルボスが持つヘルメス式魔導器に興味がある。」

だからここに来た、と呟かれた。

興味がある、と濁したが明らかに壊しに行く気満々だ。

いや知ってるし。なんて言えない私はその言葉の代わりに

「じゃあ一緒に行かない？探してる人達がいるんだ。」

「わかった。ではお前が仲間に出会うまで私が力を貸そう。」

・・・ラスボス、素直にパーティーｉｎしました。

その１２、その搭落下５分前

ラピードが軽さと迂闊さで飛んでいきそうなカロル少年を繋ぎとめる為に

トレードマークのカバンに噛み付いていた。カロル君の悲鳴は自分が飛ばされそう

な事もあるが、ラピードの頑張りによってよだれと噛み痕が確実に残る自分のカバン

を嘆いているのかもしれなかった。

そのラピードの体をがっちり押さえつけて飛んでいかないように気遣っているのは

ユーリ君だ。長い髪がばっさばっさと揺れていかにも邪魔になっている。

フレン君は重たい鎧を着ている所為か、しっかりと地面に足を着け、

エステルを抱きしめていた。

まるで何処かの王子と姫。あ、そういえばエステルはお姫様だね、

一応。

主人公この2人でいいんじゃないだろうか、画的に。

レイヴンさんは柱に足を絡ませ片手にリタ、片手にジュディスを抱えていた。

ジュディスがこの場にそぐわぬほのぼのした笑みを浮かべ、それにつられるように

にへら、と笑うレイヴンさん。そしてその2人を見て、不機嫌そうな顔をするリタ。

なにやら口を動かしているが、会話の内容まではとどかない。

けれど何を言っているのかなんとなく想像できる不思議。

そんなことになっている理由は、少し前の時間に遡る。

この人を見ていると人間の可能性について色々と問いたくなる。

というか人間なのだろうか、実は妖精なんですと語られても貴方なら信じます。

人って宙に浮くんだっけ、あんなに軽々と移動できたっけ。

ほとんどの敵一瞬で地に臥せってますね。

ご飯は何度か一緒に食べたことがあったけれど、

この人の戦い方見るのは初めてだということに今更気がついた。

「さすがラス・・・いえなんでもないです。」

たいした「友情」「努力」を発揮することもなくただただ「勝利」ばかり

を経験する我等年齢不詳コンビ。

この体に生まれてから誕生日を数えてくれる人も年数を数える環境も整う事が

無かった為、私は自分の年を自分で把握することができなかった。

前世の自分が聞いたら「なにそれ虐待？」と軽くビビることだろう。

そんなことよりこの人だ。いつも会う度情けない姿ばかり目にしていた為

今日のデュークさんはめちゃくちゃ格好良い人に見える。

後光が差すというかカリスマオーラがすごいというか。

人畜無害そうな容姿をしておきながら

汗一つかかずばっさばっさと敵をなぎ倒す、容赦も情けの欠片もないその姿に

色々な意味で絶句。

「何をしている、仲間に会うのではないのか」

「あ、え、はい」

戦闘の容赦ない具合に固まっている私を見て

デュークさんは無表情のまま小首をかしげた。

なんでこんなに綺麗で可愛い仕草をするのにそんなえげつない戦い方をなさるのか。

くだらないことを考えている間にもまた爆発音と共に人が飛ぶ。

あー、もうちょっと手加減しようよ。

ソーサラーリングを持っていなくても困らない。

面倒な仕掛けは主人公達が解除したのでただ階段を昇るだけ。

何事もなくさくさく進む私達。

やっぱり面倒ごとはプレイヤーが解除するのがセオリーなんですね。

脇役万歳。

そんなこと考えるうちにもデュークさんがまたもや敵の一団を排除。

・・・遠くない未来にこの人をユーリ君一行が倒すとか信じられないんですけど。

奇跡、というより何かの間違いが起こらない限り不可能な気がするんですけど。

あっさりと最上階についてしまった私とラ・・・デュークさん。

私は一回も戦闘に参加することなくたどり着いた軌跡。

それがデュークさんクオリティ。

ちょうどトトロのような去り方が印象的なガスファロストの主

バルボスさんが怪しい振動波を撒き散らす剣を振り上げ大笑いしてい

るシーンに遭遇。

おお、ばっちぐータイミング。

私の記憶通りにデュークさんが剣を構える。

灼熱の太陽の光を借りずに不気味に光る紫色の刀身を掲げた瞬間

彼の足元に術式が展開し、舞うは鋭い光と風。

私の記憶通り剣を壊す、はずだった。

今まで無表情を貫いていたデュークさんの顔が歪んだ。美形な顔がシリアスに歪むと

深刻な空気が漂うのでやめてほしい。

そんなこと思っている私はやっぱりどこまでもお気楽だった。

次の瞬間、台風と竜巻と地震とハリケーンがいきなり襲ってきたかというほどの

すさまじい暴風と衝撃がデュークさんを中心に広がる。

あれ？台風とハリケーンって意味一緒だったろうか。

がちゃがちゃんと音を立てて床の一部が剥がれたり、人が飛んでいきそうになる

大騒動。

ぐわんと回転する体。呼吸は驚愕のあまり何秒か止まる。
まるでいきなり無重力空間に放り投げられたような錯覚に陥った。
胃の中の物が口から飛び出しそうになった。ああ、ただでさえ2日酔い状態なのに。
反射的に目を瞑ってしまったらしい。とりあえず近くの物にしがみつこうと
猛烈にパニック状態に陥っていた私は、風の舞う中必死で目を開けた。

私の目に映るのはユーリ君一行。この衝撃の中、床に伏せたり手を繋いだり
建物の出っ張りにつかまったりしながらうまい具合に暴風を受け流している。

ラピードが軽さと迂闊さで飛んでいきそうなカロル少年を繋ぎとめる為に
トレードマークのカバンに噛み付いていた。カロル君の悲鳴と涙の理由は
自分が飛ばされそうな事もあるが、ラピードの頑張りによって

よだれと噛み痕が確実に残る自分のカバンを嘆いているのかもしれなかった。

そのラピードの体をがっちり押さえつけて飛んでいかないように気遣っているのは

保護者代表ユーリ君だ。長い髪がばっさばっさと揺れていかにも邪魔になっている。

うざったそうに髪を揺らして顔にかからないように頑張っていた。

髪、くくればいいのに。

むしろなんでそんな手入れが面倒そうな髪型をしているのかが気になる。

フレン君は重たい鎧を着ている所為か、しっかりと地面に足を着け、

エステルをがっちりと抱きしめていた。

イケメンだからできるその横暴っぷり。きっと風が止んだらエステルに平謝りだの

土下座だのするのだろう。イケメンだからこそ許される仕打ち。

まるで何処かの王子と姫。いや、騎士と姫のままでもいいや。お似合いだし。

何事もシチュエーションが大切。

主人公この2人でいいんじゃないだろうか、画的に。

レイヴンさんは柱に足を絡め片手にリタ、片手にジュディス（仮）を抱えていた。

この姿を見るのは初めてだ。おそらくジュディスさんだと勝手に信じることにする。

ジュディス（仮）がこの場にそぐわぬ笑みを浮かべ、それにつられるように

にへら、しまりの無い笑みを浮かべるレイヴンさん。これは演技なのか、

素なのかはっきりしてほしいところだ。どちらにせよ皆の反応は良い意味でも

悪い意味でも変わらないが。

そしてその幸せそうに見えなくもない2人を見て、心底ご機嫌斜めな顔をするリタ。

なにやら口を動かしているが、会話の内容まではとどかない。

けれど何を言っているのかなんとなく想像できる不思議。

水道魔導器(アクエブラスティア)の力を借りた剣は使い物にならなくなった。

予想と違うところは、剣を握っていたバルボスの手が、その・・・・

何かに切り裂かれた様な傷を負い、血みどろになっていたことだった。

あれ？なぜにスプラッタ。

腕はまるで襤褸切れのようにぶらりと垂れ下がり、

これでは動かすことは無理だろうとその場の誰もが理解する。

バルボスが飛んでいかないように、多分バルボスの掛け声で

出てくる筈だった手下達が必死にしがみついて強風の脅威から自分達のボスを

守り貫いていた。

これでは自分で勝手に飛び降りるなんて真似できないだろう。

意外と昔は人望厚きカリスマボスとして名を馳せていたらしい。本人に自殺願望が

あっても部下が止めるはず。いったいどこで人生の歯車が狂ってしまったのか。

風に乗って部下の叫び声が聞こえてきた。

多分あそこで人生のドラマが繰り広げられている。
熱血物だと私の勘が語る。どうでもいいけど。

少し距離があるこの一行までも襲ったこの嵐、発生源はおそらく確実に私のすぐ隣の
デュークさんに他ならない。何て事をしてくれたんだ。
誰か落ちたら洒落にならないじゃないか、とデュークさんに目を向けた。

すぐ隣にいたはずのデュークさんはなぜだかとても小さく映った。
苦々しい顔はまだ直らないらしい。親の敵みたいにこっち見ないでよ怖い。
ああ、甘いもの食べてないからこんなに機嫌が悪くなるんだ。
多分何らかの術か技に失敗したんだと思うが、一々気にすると人生損するのに。
今度美味しい甘味処にでも誘ってあげよう。

この世界に来てから現実逃避する回数が徐々に増えてきているような気がする。

それは生来の性格もあるのだが、現実逃避したくなるほどの状況に追い込まれている

から、という理由が大半を占める。

ユーリが真っ青な顔をしてこちらを見ていた。

口が動いている様だが全く耳に入らない。

少し間を置いて、他のメンバーの視線が同時に私を見る。

なぜだか笑いがこみ上げた。

思い浮かぶのは遥か昔の光景。

何匹かの猫だか犬だかが同じ方向を見て同じ動きをする動画。

家族で「なにこれかわいい」ってテレビを眺めながら晩御飯を片手に会話してたよなぁ。この世界に来て初めて思い出した。

そして気付く。

今、私の身に起こっている事は

現実逃避ではなく

走馬灯現象ではないかということに。

私の両足は硬い鉄の床を踏みしめておらず、心もとなく揺れていた。

手が必死に掴んでいたのは金色の金具が印象的な赤い紐。

・・・やばいよ、デュークさんの服の部品じゃん。あの顔は私の所為なのだろうか。

ぐいぐいと上から押さえつけるは絶対的な理。

空気抵抗も感じるが、やっぱり上からの力が勝ってます。重力って偉大ですね。

ああ、私、落ちているらしいです。

意味の無い自分の悲鳴はＢＧＭ。

心のどこかは冷静に状況を判断し、とても落ち着いていた。

まるで、自分は落ちたくらいで死なないと確信している様に。

その１３、落下のその後の待遇。（前書き）

物語と全然関係無い話ですが、
パソコン壊れました（号泣）
携帯でポチポチ打っていますが、更新率が遅くなる可能性大です・・・（汗）

その１３、落下のその後の待遇。

時々変な夢を見る。

友達、と言えるかどうかはわからないが、桃色の髪が印象的な少女が私の所へやってくるのだ。

今日は友達とお菓子を作ったの、と私の前にクッキーを置いた。

初めて会った時よりも背が伸び、より魅力的になった少女。

旋風が私たちの間を踊るように駆けていく。

腰まで流れる桃色の髪は月の光に照らされて、まるで芸術品の様だ。

澄んだ空と荒々しい海を囲んで私達は座っていた。

会話はひとつもなかったが、何故か心は満たされていた。

少女は立ち上がり、私に抱きつく。

「ねえ、こっそりお家まで連れてって」

私は翡翠に輝く瞳を見て、ひとつ頷いた。

夢の中の私は何故か見た事が無い建物を眺めていた。

「・・・・・・あ？」

どこかで感じたような感触再び。

胴体を何やら硬いギザギザしたもので挟まれて・・・歯ですね。間違いなく。

このサイズの口を持つ生き物はそうたくさんいないはずなんですけど。

ジェットコースター並みのスピードで飛びまくるので酔いそうです。

どこかで感じるデジャブ。

「ばっ・・・バウル・・・？」

だよね、現在進行形で空を滑るように泳ぐように飛んでいますがその影がもろ

バウルです。まるで魚影。なんでこの姿で竜って呼ばれているのか疑問。

イルカの方がまだ似てるんじゃないの？進化（？）するとクジラっぽいけど。

問いかけにはしっかり答えようとする素直な性格の彼は

「ピュゥゥゥ」

と間延びするような可愛い泣き声を響かせたあと、ぐるんと空中で一回転。

「ごめん、アクロバット飛行は勘弁・・・・私、や、病み上がりなんで・・・！」

異様な圧迫感プラス絶叫マシンに揺すられているかのような乗り物酔い。

気分は底辺に落ち込んでます。

でも命は拾ってもらったみたいです。

ダングレストから少し離れた開けた場所にそっと下ろしてくれたバウルさん。

そして意外なことに、私に頭を擦り付ける。

まるで褒めて褒めてとアピールしているようだ。

まるで猫みたいなじゃれ具合に驚きながらも顔周りをなでなで。

ついでにサービスで全身マッサージをゴリゴリと。

お客さん、固いですねー。と冗談半分で言った言葉にも

律儀にきゅいきゅい鳴いて返事をくれるやさしい性格の持ち主でした。

ああ、滝の近くでも無いのにマイナスイオンがっ・・・！

バウルと別れながらも頭は別の考えで一杯だった。

私、俗に言う死亡フラグというのが立っている気がする。

頻繁に怪我したり落ちたり飛んだり助けられたり。

この人生の中で珍しい経験ばかりでお姉さん戸惑います。

この死亡フラグというものは自分では自覚できないというのが非常に怖い。

別に私ちょっと暗躍しているだけで悪役じゃないから、いきなりいい奴になって

グサリシーンの心配も無いはず。危ない台詞は一言だって吐かない。だって怖いし。

どこで人生設計間違えたのだろうか。

はじめはふらふらーっと海の藻屑のように漂っていただけの

存在だったのに、いつからかギルド活性化に向け色々活動してたからなぁ。

主要都市は一回りしたし、戦争で犠牲になった街も巡った。

ちょっと首都で問題起こしたり、どこぞの施設を破壊してしまったりと

やんちゃしたのがまずかっただろうか。

「うあーーーー！！！もう、どうでもいいや面倒だし！」

あっさり気持ちを切り替えられる所が唯一の良点です。

行き違いになったら困るからダングレストに戻ろう。

そしてアイススピリッツパフェを頬張ろう！

昨日もお世話になったダングレスト一の有名店は今日も賑わってい

た。

「おや、今日はあの白いハンサムさん来ないのかい」

なんて軽口を弾ませながら店員のお姉さんはテーブルにコップを2つ置いた。

「そうそう、今日はダンディーの日なんで。」

私の横にドカリと音を立て座り込む男を見て微笑んだ。

「久しぶり」

「おう」

同じテーブルで同じ料理を食べる彼と私の関係は、簡単に言うと上司と部下だ。
彼はギルド、『朧月』を自分の持つ威厳と風格と実力を存分に使い、ちょいとおかしなギルドメンバーを時には褒め、時には鉄拳を与えつつまとめている。

問題児を諌めるのも当然彼の仕事という訳で・・・ギルドメンバーの中で一番仲良しなのは彼だという自覚はある。

「手筈は整ってるぞ。もうそろそろじゃないのか？」

渡されたのは数枚の報告書。

ビッシリと事細かくまとめ上げられるのはある男の日常と、その日常に割り込んだ捏造についてだった。

「ありがと、さすがボス」

いきなり鉄拳が飛んできた。眼力すごい眼力怖い！

これが殺気って奴なのか！

「誰　が　ボ　ス　だ　と　？」

「失礼しました！福ボス！ふーくーぼーすー！」

ゲンコツを頭に押し付けられてそのままグリグリ手を捻られる。

「ただでさえ忙しいってのに何だ。騎士の行動は最近おかしいってのにお前は長期休暇なんぞ取りやがって！ついにあいつらボスに賞金かけて血眼になって探してやがる。まあ、見つからねぇだろうが。」

一端言葉を切った彼は心底嫌そうにこう言った。

「お前はこれ以上厄介事持って来ないでくれ。頼むから。」

「・・・・了解です。」

スポンサーがいなくなっては後が辛い。

私は大人しく頷いておいた。

その１４、暴走男を止める会。

「あら、楽しそうね。」

私たちの前に現れたのは、聞き覚えある、大人の階段昇りつつある少女だった。

「おう、『伝説のギャンブラー』サン。３日ぶりだな。」

副ボス、お知り合いですか。

ジュディスさん（仮）は、涼しげな顔で爆弾を落とす。

「あなた、ガスファロストから落ちたんじゃなかったかしら。怪我は無さそうだけど。」

副ボスが大きく大きくため息をついた。

『忠告してすぐこれかよ。』とその背中は語っている。

終わった事は仕方無いじゃないか。そもそも行きたくて行った訳でもなく、

落ちたくて落ちた訳でもない。

「それより、店内の店員さんもお客さんも
私達から距離を取るのは何故デスカ？」
副ボスのどんより空気を切り換えるため、
ジュディスが来てから感じる疑問を口にする。
「ああ、それは・・・。」
ジュディスは素敵に無敵で無邪気な笑みを浮かべ
副ボスは戦い疲れた様な、皮肉ったらしい笑みを浮かべた。
ああ、だいたいのことはその一瞬で理解できる不思議。

「この店で賭博やって一人大勝ち・・・鬼かアンタ。」
うふふ、とどこか余裕の笑みを浮かべる彼女を視界に入れつつ思い

出す。
たしか賭博にめっぽう強い人だった気がする。称号もあったしなぁ。
仲がいい者達が集まれば時々ポーカーゲームなどで盛り上がり、
次の日、運が悪い者は後で涙する場合がある。
今回不運だったのは、その場に賭博の鬼がいたことだ。
ひょんなことから出会ってしまった小娘に、負け続ける男達。
一勝も掴まずに勝負を引くなんて、男の面子と誇りと意地が許さない
なんて言い訳する筋肉バカの男達は、結局財布の中身を残らず
献上する羽目になったらしい。
「あー、だからこんなに人が少ないんだ。丁度御昼頃なのに。」
きっとご飯代を浮かそうとしているのだろう。
もしくは、本格的に金が無いのかもしれないし、
家族から大目玉くらっているかもしれない。
「私、何をするにも手を抜かないって決めてるの。」
一番損してたのは、多分この人ね、とジュディス

はあろうことか副ボスを指さした。

「彼、自分のお金を一文無しの仲間達に分けてあげたのよ。」

筋肉バカな被害者はなんとうちのギルドの面々だったらしい。

なんとはた迷惑な話だ。

あいつらがよってたかって金をせびりに来たらどうするんだ。

とりあえず彼を讃えるべきだ。

「さっすが我らがボス！」

鉄拳が飛んだ。

「それより私、コッチが気になるわ。どこかで見た顔なのだけど。」

ジュディスの指差した写真を見ると、

憐れな運命を辿る男の姿があった。

「ああ、これね。見る？」

ジュディスに報告書を差し出した。

形のいい眉を潜めながら読み進める姿を横目に副ボスが問う。

「いいのか、見せちまって。」

「いいのいいの。ある意味事実だし。ってか事実になるし、するし。」

「・・・中々、興味深かったわ。」

「そりゃどうも。」

少し呆れた様な顔を浮かべながら、報告書を返された。

執政管、ラゴウ

それが男の名であった。

男は金と権力だけが生涯の友であり、心の拠り所であり、男の全てだった。

しかし、評議会と言う名の権力は、
自分に都合の悪いものは次々と排除するという
非常に非情な組織であった。
今回私達がしたことは、ただ男の罪に『おまけ』を付けただけだ。
数枚の写真は今まで仲間だと思っていた
評議会の連中を敵に回すだけの威力はあったらしい

簡単に言うと、
ストーカー現場捏造写真を送り付けたのだ。
この時代の合成技術がハイレベル過ぎて驚愕。
何故か前の文明の技術が残っていたらしい。
どれだけ凄い文明なのか、少し気になった。
そういえば、ナム孤島なんて訳わからない技術オンパレードだしね。
まず合成写真なんて出回らないこの世界に、
偽物の写真だなんて解るのは、専門の研究者くらいしかいない。
配達するのは、神出鬼没で有名な某新聞記者。

有名であるため、不信がられないのだ。

ストーカー被害者が評議会重鎮達の大事な

お孫さん達です←ここ重要。シジ馬鹿爆発です←重要2

貴族ゆえ、『調子に乗るなこのジジイ』とオブラートに包み発言さ

れるのだが、

調子乗っている心辺りが有りすぎるラゴウさんは自分の犯していな

い罪に関して

全く気付けないという失態をしていた。

そして調子に乗った我らギルド工作係達は他にも頑張った、らしい。

色々報告書にまとめられているが、正直これを考えて実行した自分

の仲間が恐い。

他人の不幸は蜜の味と言うが、なんだか同情したくなるのは何故だ

ろう。

この世界、ストーカーは罪とは言えないらしいので

ラゴウ執政管のミスを今か今かと待っていた、

孫ラブの権力者達にとって、今回の悪巧みがバレて

捕まった今回の事件は願ってもないチャンス。

罪を軽くして逃れるなんてまず無理な話になったという訳。

むしろ牢屋で生涯お幸せに過ごしてください。

これがユーリ青年必殺仕事人・・・あれ、仕置き人だっけ？まあいいや。ユーリ青年暴走を止め隊第１回目の活躍である。

その１４、暴走男を止める会。（後書き）

３ＤＳでポチポチ打つ珍しさから、更新が進んでおります。
でも私のパソコンはもうダメです。中古で検討してます。
感想をいただきありがとうございます！嬉しさで浮かれまくっているのですが、どこで喜びを叫んだらいいのかわからないのでとりあえず此処で叫びます。
いえーい！＼（ω´）／

その15、怪鳥出陣。

最近変な夢を見る回数が多くなった気がする。

今までは遠いところで映画でも見ている気分だったのだが、

最近では夢の中の私の考えることが手に取るようにわかる。

なんということだ。夢の中の私は人間不信に陥り、近くに人の気配を感じると

ひたすら息を潜めかくれていたことがこれまでの夢で発覚した。

・・・なにがあった夢の私。

唯一心を許していたのがあの桃色髪の女の子だったみたいだ。

澄んだ空と荒々しい海の元で私はひっそり生きていた。

あ、間違えた。私であろう夢の中の私が生きていた。

パカポコパカポコ

軽やかなリズムと共に小さく車輪の音が響く。

車輪の軋み具合と蹄鉄の鳴り具合から、相当のお金持ちの馬車と推測する。

珍しい。この街では滅多に聞かない音だ。

私の街滞在経験が一番長いのはここ、ダングレスト、だと思う。

まあギルドなんてものに入った為、この街によくいたというのもあるが、

この街のがやがやして暖かい雰囲気に魅了された、というのが大きな理由だ。

それに現在進行形で家なし子の私にとって、ギルド員の家に居座れるという特典もある。

むしろそれ狙いである。宿代浮くし。

暖かい毛布に包まり、静かで小さな幸せを噛み締める。あぁ、あと３０分。

やっとのことで薄目を開けると、暁と黄昏の色に染まった白い壁。

ああ、時間なんてひと目でわかる訳がなかったのだ、この街は。

太陽のことなど関係なしに、空はいつでも焼けている。

名残惜しくもベッドから降りることにした。

ぽけーっとした頭で目元のメイクを頑張っている最中、

ピュロロロと甲高い泣き声と慌てた人々のざわめきが耳に届く。

・・・・・・・空耳かもしれない。もう一度、今度は両耳に手を添えてみた。

怪鳥の鳴き声と

「うわなんだありゃ！？でけぇ！鳥か！？」

何故かはしゃぐ副ボスの声が遠くに聞こえた。

・・・いかん、イベントが来た。

突如この街で旋回アクロバットショーを繰り広げる怪鳥。

破壊活動をしているようには見えない。

ピンポイントでエステルロックオンなんですねわかります。

剣と魔法の世界に生まれても、魔法は全く理解できなかった。

彼らにとって魔術とは呼吸と同じくらいに当たり前のものであって、
それに理由なんてないのだ。
世界の空気中にはエアルという摩訶不思議物質が酸素や窒素と同じくらい
当たり前に存在し、エアルの結晶というコアという物体を持ちいれば
風も氷も炎も起こせるのが当たり前なのだ。
私の脳みそでは到底理解できないことだった為、エアルをマナに変えてどうのこうのは
結局主人公一行に任せるしかないのです。頑張ってくれ天才魔道少女よ。

そんな訳で怪鳥は対策仕様が無いです勘弁してください対応できませんからね私。
それでも走り出すのは、そこに彼女がいるからだ。

「わたしが・・・狙われっ！？」
「ぼけっとしない！逃げるよエステル！」

暢気に怪鳥に問いかけてどうする。

もうちょっと狙われてるという危機感を持ってくれお願いだから。

エステルの腕をぐいと強引に引っ張りながら立たせる。

狙われているのに座り込んで治癒術とかやめてほしいお願いだから。

エステルの息を呑む音がはっきりと聞こえた。

そしてその目線が私の足に釘付けになったのも見た。いや、幽霊じゃないです生きてます。

後ろから「ぇぇぇぇぇぇっ！ステラ、ステラがいる！！」と慌てた声が

届いた。

「引け、沈みゆくものよ。忌まわしき世界の毒は消す。」

「人・・人の言葉・・・！」

エステルが小さく呟いた。

まるでボイスチェンジャーを通したような声。間違えなくフェロー

である。

私の記憶と言ってること違うような気がするのだが・・・・。

エステルも私もそしてフェローも沈黙した。

エステルも私もパニック状態で何を言えばいいのかわからなかったし

もしかしたらそれはフェローもなのかもしれなかった。

その15、怪鳥出陣。（後書き）

ゲーム上ではこのシーン、カタカナ混じりでフェローさんが喋っているのですが、

その後の会話ではごく普通の文章紡いでいますので、今回も普通の文で

表記しました。

その16、おててつないで。

この後はみなさん想像できると思います。

ヘラクロス・・・・ヘラクレスだったっけ？

なぜだかカブトムシとかポ〇モンやらを思い出させる名前の

強大で巨大な要塞から術式砲弾を繰り出されて橋が崩れる、という

訳。

遠くの広間からでもドンの「へったくそめ！俺らの橋、どうしてくれる！」

というしゃがれた怒号が聞こえてくる不思議。

そうだよねぇ。怪鳥の被害より騎士団の爆撃の方が懐痛いよね。

完全なとばっちりで轟音と共に崩れ落ちる橋。なんて理不尽。

皆さん復興頑張ってください。ユニオン幹部の苦労が目に浮かぶ。

手をつないで走るなんて、小学生以来の出来事だった。

なぜかユーリが私の手を握り、私のもう片手にはエステル。

がしいっと効果音が付きそうな勢いで掴まれた。その2人の表情は硬い。

なんだかごめんなさい、本来なら二人が手を繋いでちょっといい雰囲気のはずなのに

ぶち壊して本当に申し訳ない。

そのまま走り出して数分、エステルはジュディスを手つなぎ仲間に引き入れた。

ちょっと寂しそうに追いかけるカロルに気づいたのか、

走りながらジュディスはカロルに手を差し出した。

そしてそしてカロルはラピードの尻尾を握っているという不思議。

なんだろうこの仲良し集団。

しかもそのままの状態で街を出るという始末。すごいね、魔物達も見慣れないモノを

見てちょっとびびっているというか警戒しているというか。

ラピードが気を利かせてホーリィボトルを振りかけてくれた。

さすが、空気を読む犬。

・・・フレン君と会わないの？

ダングレストから少し距離を置いた所でカロルとエステルの要求の元、休憩が入る。

ユーリさんはガスファロスト身投げ事件について物申したいらしい。

いや、今回は私悪くないです。不慮の事故です。

なにやら不穏な空気が渦巻いていたので思わず待ったをかけた。
風の様にマッハで走り（イメージです）、ダングレストの壊れた橋の前でポツリと佇む
白い彼をがっちりと捕まえ、
「ちょっとお話が。」
道連れは多いほうが怖くない戦法で行きます。

「そんな訳で、今回はデュークさんが全面的にやらかしたのであって、
私、巻き込まれただけから、完全に事故だからね！」

デュークさんはいたってマイペースを崩さなかった。

「今回はお前たちも被害にあったそうだな、すまない。」

「ああ、危うく誰かさんみたいに落ちるところだったな。

アンタ、もうちっと気をつけて術使えよ。」

死に掛けたくらい重要なことなのに両方ともあっさりしすぎな二人になんだか呆気にとられた。

「で、原因は何だったの？」

カロルが純粋な疑問をぶつける。

「・・・滞留エアルに干渉する蓄積エアルと・・・コレの相性を計算に入れていなかった。」

不気味に光る紫の剣を指で指しながら説明されても正直わからない。相性って、何。

・・・その剣、誰でもなんとなく使える代物じゃなかったっけ？

突き詰めると「エアルとは」から延々と続きそうだ。
説明を聞いて理解まで漕ぎ着くには時間と何かが足りないです。

もし、この場に天才魔道少女が居れば丸くおさまったかもしれない
いや、もし居たとしてもそれ以上の質問攻めと今後の人生を揺るがす面倒事が起こる為、
今は居なくてよかったと後の私は思ったのであった。

その17、6分の1の選択肢。

朝日に照らされ張り切る一同。

「いくぞっ『凛々の明星』っ！」

カロルの元気な声が響き、周りの木々から小鳥の群れが飛び立った。

ダングレストで既に『凛々の明星』が誕生していたということに少し驚いた。

ほんとは違う名前を考えてたんだけど・・・と言葉を濁すカロル少年。

『勇気凛々胸いっぱい団』なんて名乗ってたら、それから数年後、自分のネーミングセンスに身悶えるのは多分カロル君だ。

それにユーリ青年によって略されること請け合いだ。『勇気団』とか。

次第に正式名称が忘れられること請け合いだ。

私は特に何もしないけど頑張れ『凛々の明星』。

まず最初に名前を噛まない練習から始めるのだ『凛々の明星』。

・・・カロルの噛み具合が半端なく酷い。これでは名乗った時笑われるぞ！

ユーリもジュディスも若干言い難そうだ。発音難しいぞ『凛々の明星』。

メンバーはユーリとカロル、そしてジュディス。

「まぁステラも今のギルドをクビになったらおいでよ、歓迎するよ！」

カロルが得意げに胸を張って宣言していた。

クビになる事を嬉しげに語られても困る。本人に悪気が無いから怒れなくて困る。

エステルは高官達と話し合った上で一年間の自由を自分でもぎ取った。

旅は少女を強くしたらしい。

むしろ高官達はなぜ止めることができなかったのだろう。謎だ。

そして勝手にギルドスポンサーになってしまうのは如何なものだろうか。

まあいいけど、気にしないけど。

「よし、カロル先生、行くか」

「ええ～！！ボクそんなの無理だよ！ユーリやってよ！」

「・・・ユーリ君だと今後の騎士さんにかわいそうな性癖与えそうだから

やっぱりここは女の子の方がいいかな・・・。仕事熱心で真面目な騎士さんの為に」

「・・・かわいそうな性癖って、何です？」

「うふふ、何かしら」

「ジュディスさん、含み笑い怖いです。」

言わずと知れた、ヘリオードでのお色気イベント。

真面目に見張りをしている騎士殿をあれやこれやで誑かして最後に殴り倒すだけなのだから

お色気に拘らなくたっていいだろうとひそかに思う。

とりあえず、宿であみだくじを作ってみました。

５本縦線を引き、まず名前をそれぞれ書く。
エステルとカロルがいかにも『興味津々』という単語を顔に貼り付けながら覗き込む。
私のへたな字を見てどこからか生暖かい笑みが見えるのはご愛嬌。
いいじゃないか、こんな記号を字だってまず認識するのにどれだけ時間を掛けたことか！
「よし、平等を記すためにも、ひとり一本好きなところに横線を入れてね」
「わん！」
少し離れたベッドの下から控えめな鳴き声が届いた。
・・・・・・・・・・・・・・・ぁ。
「ごめんラピードの縦線忘れてたぁ！一生の不覚！すぐに付け足すから！」
「ぇえ！？、ラピードは止めようよ！人間じゃないじゃん！」
「いやいやカロル君、愛犬家の一人や二人、この子なら落とせる！」
ラピードはみんなのアイドルだと主張した私に

自分はやりたくないけどラピードを選択肢にさせるのも反対のカロル。

「いいんじゃないでしょうか・・・ラピード、かわいいですし。」

エステルは賛成らしい。ジュディスは特に口を挟まず、笑みを深めただけだった。

「でもステラ、あの騎士が犬好きかわかんないじゃん！」

「そう言うならカロル、あの騎士のストライクゾーンがお子様なのかご婦人なのか誰もわかんないんだ！即ちテイクを重ねて当たって砕けろ！」

「いいかステラ。」

ユーリが私達の会話に口を挟んだ。

真剣な眼差しで何を言うかと思えば

「ラピード、オスだから」

・・・犬の場合は関係無いんじゃないだろうか。

それに蚊帳の外みたいな顔してますが貴方の線もしっかり入ってますよ、ユーリさん。

ひとりはみんなのために、みんなはひとりのためにという

学級目標のような平等性のギルド作ったんだから、そこのところは納得してください。

まあ、おたくのボスの我侭なんだけど。

（ボクがやるんだったらユーリもやるよね！と得意げに語るボス。）

みなさん人生初のあみだくじだったらしい。

エステルは「え、それ何です？」状態

そうだね、純粋培養のお姫様とは次元が違うよこれは。

カロルは「ボク、下っ端だったからやったこと無いな・・・」
あみだくじは主に罰ゲーム的に使われるらしい。
嫌な仕事を誰に当てる、とか。なんてネガティブ。
ユーリは「んなもんしたことねぇな。下町はほら、弱肉強食だから。」
・・・拳で語る下町って怖い。フレンに勝てないんじゃないの、この人。
いかにも自分は負けたことありませんって顔して喋ってるけど。
ジュディスは「・・・私もそんなところかしら。」
貴女の故郷はたしか肉体派全然いなかったはずですけど。
ほぼ頂点に君臨してたんですか。

結果：

「おぉ」

「あ」

「え」

「あら」

「・・・こんな感じで」

ペラリと捲った紙を広げてみんなに見せた。

・・・・ラピードが当たった不思議。

半ば冗談だったんだけどな。色々な意味で大丈夫だろうか。

不安が過ぎる中、ユーリがラピードに「おめでとさん」と声を掛けた。

その17、6分の1の選択肢。（後書き）

お色気イベント、誰にするかめちゃくちゃ悩んでいました。

物は試しと、あみだくじ本当に作り試した所、ラピード・・・。

もはやお色気関係無い・・・。

その18、ラピード君奮闘記。

お日様ぽかぽかいい天気。

今日は主に魔物を倒してお金&素材をコツコツ集めています。

「ラピード、今日もがんばってますね。」

会話をしながらスパスパ攻撃している妙に戦闘馴れしたお姫様が話を切り出した。

そう、ラピードは頑張っている。けれど主旨が変わっていないことを切に願う。

「でもさ、アレ、絶対楽しんでるだけだよね。」

身の丈もある斧を振りながらカロルがにやりと笑った。

カマキリっぽい魔物をエステルに押し付けておいて、自分は鳥系の魔物にまっしぐら。

見紛うことないヘタレっぷりだ。まぁいいか、子供だし。

「あいつが『問題ない』って言ったんだ。まぁ大丈夫だろ、多分。」

ユーリはぐるんぐるんと意味がわからない剣舞で敵をザクリザクリと吹き飛ばした。

「別に信じてないわけじゃないんだけど、大丈夫かな・・・っと！」

丁度ユーリの剣圧で飛んできた魔物を金属バットで打ち上げる。おお、ホームラン。

何故武器が金属バットなんだって？気にしなくていいよ。

この世界でふと見つけて珍しさと懐かしさからつい買っちゃったんだよ。

野球なんて体育の授業でしかやったことないけどね！

「ラピードが居ないと素材の集まりが悪いわね、今まで彼に頼り過ぎていたのかしら。」

完膚なきまで叩き潰すことを信条にしているジュディスは魔物ごと、素材をぶち抜いた。

ああ、何故かガルドが真っ二つに割れている。この世界に銀行的なものってあったっけ。

この場合どうすれば・・・。

そもそも何故魔物がいつもお金持ってることについて、誰も疑問に思わないんだろう。

そんなことはさておき

そう、ラピードはいつもの鎖の首輪を赤いバンダナに代え、装備を全部外した姿で

今日も見張りの騎士と戯れている。

私は今までのゲームの記憶から、ラピードというキャラクターは、男前で一番の冷静者

だと思っていた為に、当然こんな馬鹿げた事、断ると思っていた。

だが、本人（本犬？）はやる気満々で吠えたのだ。
ユーリ曰く、「まかせろ」ということらしい。

少し驚いた、そして少しなぜだか安堵した。

それから数日間、敵情視察と称してラピードは騎士と遊んでいる。

様子をみんなでこっそり見に行くと、夕焼け小焼けの歌が似合う風景をバックに
一人と一匹は落ちていた木材から削り出した棒を使って、
飼い主と飼い犬のような光景を繰り広げていた。

「投げた棒拾って来い」的な、アレである。

騎士は根っからの真面目さんらしく、ラピードと戯れながらも立ち位置を変えない
仕事熱心さを見せた。これは手ごわい。

いつものキセルの代わりに棒を咥えながら緩やかに尻尾を振る彼を見て、

結界魔導器の影から笑みがこぼれた一同。

和やかな光景を見せられて、自然に全員の頬が緩む。

「・・・・私だって、私だってラピードとあんな風に遊びたいです・・・・！」

エステルさん、何だか萌えてるようですが空想の世界に羽ばたくのは後にしてください。

ラピードから避けられていると思い込むエステルにとって、この事態はかなり

ショックな出来事なのだ。

「エステルもラピードに棒投げてみれば？案外一緒に遊べるかもしれないよ？

ボクは・・・ダメだったけど・・・。」

カロルはエステルを励まそうと話をしたら、逆に自分がラピードからそっぽを向かれた

出来事を思い出したらしく、気分が同じように沈んだらしい。

「何度も誘ってみれば必ず遊んでくれるんじゃないかしら。彼、優しいもの。」

ジュディスからのフォローが入る。

でしょう？とユーリに目で問いかけた。

「まぁな。オレ達は先に夕飯の準備でもしようぜ。腹減ったし。」

「私、明日ラピードと遊びたいです！」

「ボクも！ボクもっ！！」

一日中森を駆け回った疲れをじんわり感じながら宿へと歩き出す。

やけに夕焼けが煌びやかに見えたこの日、エステルとカロルの目も輝いていた。

あれ、私達の目的って・・・・。

最近はやけに晴れ間が覗く。これが主人公補正というものなのだろうか。

夜中によく散歩に行くユーリ青年。昨日も昨日でしっかり外出していたらしい。

朝ごはんを食べながら本日の行動を決めるのは一行の日課になっていた。

「夜、こそこそ町を出て行く騎士団連中と出くわした。装備も厳重にしてたし、当分

帰ってこねぇだろ。今日潜入しようぜ、労働者キャンプ。頼むぞ、ラピード。」

「わん！」

いつものキセルを咥えながらラピードが吠えた。なんだか頼もしい。

「がんばってくださいね！」

「期待してるわ」

エステルとジュディスはにこやかにエールを送った。

「ラピード、大丈夫？ボクなんだか心配だなぁ・・・。」

「いざとなったらカロルには悪いけど、殴り倒そうか。っていうか最初から
そうした方が格段に早かったんだけど。」
だって、最終的にはそうなるでしょ？むしろそれ以外の選択肢はあるのか。
「ステラ！だから面倒事は起こしたくないんだってば！」
カロル君はわかっていない。面倒事に巻き込まれる為に生まれたような
ギルドを作ったのだから面倒事はこちら目掛けて否応なくやって来るのだ。
残念なことに。
「ごちゃごちゃ言ってないで行くぞ。エステル達行っちまったぞ。
そうだ、ラピード時々詰めが甘いからな、もしもの時の為に謝っとく。
カロル先生、ごめん。」
「・・・・・えええええええっ！！！」

長時間勤務で文句ひとつ零さない、至って真面目な騎士はびっくりしただろう。

ひょんなことから知り合って仲良くなった犬が

体中泥だらけで荒い呼吸をしながら後ろの片足を引きずり現れたのだから

「わ、わんこっ！！」

自分の前で倒れる犬を見て騎士は絶叫。

・・・数日間でどんだけ仲良くなったんだ、君ら。

「なかなかのお芝居ね。単純な誰かさんとは大違い」

「そりゃどうも。あいつ昔ああやって遊んでたんだよ。主にルブラン達と。」

あれは逃げる時役に立った。と呟くユーリに対して全員の目が白い。

囮作戦ですか。ラピード囮にする作戦って何したんですか。

そもそも住所割れてるんだから逃げても意味無いんじゃ・・・。

「ユーリ・・・・。」

エステルさん、何だか燃えてるようですがお説教は後にしてください。

「あ、ああやって気を引いておいて、騎士がお医者さんを呼びに行く間に

通っちゃうんだね。ラピードちゃんと考えてるじゃん！」

カロルの声が皆の意識を現実に引き戻させる。

「医者、医者に連れてってやるからなぁ！」

ぐったりとしたラピードを抱え上げ、走り出す騎士。

そうだね、医者を呼ぶより連れて行く方が時間かからないものね。

そのままラピードを置いて持ち場を離れてくれることを一同は望んでいたのだけれど。

声にぐずぐずと効果音がプラスされていた。泣いてる。この人絶対泣いてる。

結果的に、見張りは居なくなった。

けれど、ラピードが面倒な事に。このまま置いていくのも仲間として忍びない。

「・・・あの子、このままじゃ演技だってバレるんじゃないかしら？」

ジュディスさんが冷静に突っ込んだ。

騎士に抱きかかえられていたラピードがこっちを向いた。

このまま不意打ちで気絶させればきっと何事もなくキャンプを捜索できるだろう。

しかし、数日間とはいえ、一人と一匹の友情は思ったより根を張ってしまったようだ。

まるで『助けてくれ』と縋る様な目を見て全員が確信した。

「・・・コレ、失敗じゃない？」

私の呟きは結界魔導器の発動音に呑まれて消えた。

その19、お菓子作りは好きなんです。

保護者ユーリ君がラピード回収に乗り出している数分間、私達は頑張った。

騎士団詰め所からの爆発騒動が気になり、そっと中を覗くと

魔導器大好き帝国直属魔導器研究員リタ・モルディオ嬢が一方的に爆発を起こしていた。

騎士達は成す術も無く一方的な攻撃をただただその身に受けて倒れる。なんて情けない。

「なにこれ」

カロルの一言が一行の心情を表した。

まさしくなんでこうなったの図である。

燻ぶる床や荒ぶる炎を背景に仁王立ちする我等が天才魔道少女を押さえつけるのに

苦労したのは言うまでも無いから割愛する。

ちょ！なにすんのよ！！などと元気に騒いだ声が、私の顔を見て止まった。

「なっ！えっ！えええええええええええええ！！」

あ、リタと会うのガスファロスト落下以来だった気が。

彼女の真っ赤な顔はみるみるうちに青く変わった。

・・・・エステルの後ろに隠れて、まるで幽霊でも見ているような顔で

こっちを見つめるのはやめてほしいのだけれど。

「アンタ、何で生きてたのよ。」

「まるで死んで欲しかった的な言い方やめてよ。」

リタが冷静さを取り戻した後

騎士の増援が来ることを懸念し、詰め所を離れ結界魔導器の元で話し合う一同。

尻尾を下げたラピードを連れて、ユーリが丁度良いタイミングで戻ってきた。

わん、とこちらに何か訴えるように鳴いたラピードにユーリが相槌を打つ。

「流石にオレも焦ったぜ。ラピード解剖されそうになってた。」

・・・なにそれ。

疑問を浮かべた一行に対し、大雑把にユーリが説明する。

「オレが駆けつけたときには既に医者にラピード預けられてて、あの騎士、結構

隙だらけだったから今がチャンスだと思ってとりあえず夢の世界に飛ばしたんだが」

「ユーリ、質問。」

「なんだ？カロル先生。」

「具体的に、何したの」

「殴った。」

「えーー！！ボク言ったじゃん！こんな小さいギルド睨まれたらおしまいだって！！」

早くも話が脱線しかけている。

ユーリはあの泣いてる騎士を殴り倒したのか。なんたるＳ・・・いやなんでもない。

どの道殴られることはわかっていたが、それは可哀相だ。

女の人を襲ったのとは訳が違うのだから何だか可哀相だ。

「終わってしまったものは仕方ないわ。それからどうなったのか知りたいのだけれど。」

「そうです！ユーリ、早く続きを聞かせてください！」

ジュディスとエステルが話を戻す。

こんなところでチームワークの良さを垣間見た。

「ああ、そんで医者がいる部屋に入ったら不気味なメガネのおっさんがメス持って

・・・・・・・・・・笑ってた。」

「うわ、それは私も経験ある。」

思わず私の脳裏に怪しいメガネのおっさん、もとい医術を極めたのだろうが

何故か一々悪役に見えてしまう、雰囲気の危うさと歪みっぷりが

半端ないコ・メディカルの姿が脳裏を過ぎった。

あと、取り巻きたちも笑ってたな・・・。

どこか遠い目をしながら語るユーリに同意する。そう、あれは怖いよ。

「それ、本当に医者なの？」

犬っころ、仮病だったんでしょ？なんでいきなりメスなのよ、とかリタに呟かれたが、

私たちにそれを確かめる術は無い。

「まあ、今回は仕方ないとして、これからは危険なことしないでよね！

見張りもいないし、行こうよ、労働者キャンプ。早くディグルさんを見つけなきゃ！」

明らかに今から危険に突っ込む筈なのだが、カロルは言い切った。

そう、今回真の目的は色仕掛けを成功させることでは無く労働者キャンプにいるはずの

ディグル氏救出なのだ。

まあラピードの取った行動は色仕掛けではなく健全な号泣友情映画がちらついたが。

・・・・・危うく本来の目的を忘れるところだった。

「イエガー！やっちゃいなよ！」

「イエス、マイロード」

まるで任侠活劇のワンシーンのような会話を繰り広げながらも、締めの言葉をコレにするのはやめてほしい。

特にディグルさんというある意味本家の前でするとかやめてほしい。

「オー。誰かと思ったらクレイジーガールではありませんか、お久しぶりデスね。」

「その呼び方止めてくださいって何回言ったらわかるんですか。
ルーさんはいつも良い意味で言ってるのか悪い意味で言ってるのかわかんないんで
喧嘩売られてるのか時々判断に苦しみます。」

「お互いサマデスね。ワタシはイエガーです。間違えるなんてノンノン。」

「大丈夫です。ある意味合ってるんで。昨日クッキー作ったんですけど、要ります？」

彼の作り物の気味悪い笑顔が一瞬消え、一瞬だけ爽やかな笑顔を覗かせた。

「オー、ナイスタイミーング！実はもうそろそろ、そちらにゴーする所でした。
気が合いましたね！これはおそらくディスティニー！」

舞台は労働者キャンプ。
何回かギルド的な交流を持つ彼は結構なお得意様だ。

彼は月に一度、大量にお菓子を買い込んでいく。
そしてカプア・トリムの小さな孤児院にお土産として持って行くのだ。
彼との会話をしながらもガッツリ戦いは繰り広げられている。
ルーさん、もといイエガーは会話をしながらユーリのトンデモ曲芸をさらりと受け流し、
魔術詠唱中のリタに銃を一閃、背後からのジュディスの攻撃も変形鎌で難なく防いだ。
あなどれない敵である。
ちなみに私はちょっと離れたところからあわよくば変形鎌をホームランしてやろうと
金属バットを片手に隙を伺っている。・・・あー、でも全く隙が無いお人だ。
会話しながら戦闘って結構難しいのだ。とりあえず、私には無理。
そして手持ち無沙汰な私に話しかけてくる余裕を見せるイエガーに対し、
ユーリとジュディスの顔がにやりと怪しく歪みました。戦闘コンビ、燃えてます。

一通り戦闘を終えると逃げる、それが悪事を働きながらも余計な波風を
立てないように頑張る海凶の爪の手腕だ。
イエガーの呼び声に2人の可愛い少女が飛び出した。
ゴーシュとドロワットである。

「あーステラちゃん！お久しぶりなの～！」
ぽやぽやした雰囲気でこちらに手を振るドロワットに一喝するゴーシュ。
でも私に向かって小さく一礼してくれたゴーシュ。躾が行き届いております。
うむ、今日も仲がよろしいようで。

お得意の煙幕を使って逃げるお得意様に、昨日作った大量のクッキーの袋を投げ渡した。

それは最後まで私の手元をキラキラした目で凝視していたドロワットが受け取った。

彼女はキラキラの瞳を更に輝かせ、クッキーの袋を大切そうにしまいこむ。

後で弟、妹分達と分け合うのだろう。ゴーシュは苦笑していたがこちらに向かい

頭を下げた。

その１９、お菓子作りは好きなんです。（後書き）

声優ネタ、多いですよね。

あと、イエガーさんとの戦闘後にジュディスさんが

セーラーマーキュリーの台詞を言っちゃうそうですよ。

うーわー。小さい頃過ぎて記憶がおぼろげだっ・・・。

その２０、お久しぶりです。

ここの後始末はまかせた！と今回の騒動を丸投げした私たち。

後の事情聴取やらのごたごたをすべて放棄できるのは将来有望なフレン君のおかげに

他ならない。ありがとう。きっと私たちのせいで余計な報告書作成や残業に

追われることになってしまったり、更には有望堅物副官ソディア嬢の機嫌が急降下。

ギッスギスした雰囲気に寧ろ可哀相なのは全くそのことに気が付かない

天然ボーイフレン君より、それに巻き込まれる騎士一同

なのかもしれないが、どうか心を強く持ってほしい。

結局敵さん一同を見失ってしまった一同。先ほどの煙幕の影響でラ

ピードの鼻は

あと数時間は使えないだろう。エステルはまだ追いかけたそうだが、それでは目的が移り変わってしまう。諦めて進むしかなかった。

「ちょっと、フェローってなに？『凛々の明星』？説明して」

「そうそう、説明してほしいわ。」

・・・・・ん？

リタに続いて聞き覚えのある声が届いた。

皆がきょとんとしながら声の方を見る。

・・・・足音一つ聞こえなかったんですけど。

「なによアンタ」

「なんだよ、もう忘れちゃったの？頼もしき男、レイヴン様だよ。」

「なによアンタ」

「だからっ・・・レイヴンさま・・・・・。あ、ステラちゃん元気だった？

ちゃんと足ついてる～？」

ひらひらと手を振りながら声をかけるレイヴンさん。
やはり生きてるかどうかの確認は足があるか否かなのだろうか。
もう3回目のできごとなんですが。
リタからの攻撃を必死でかわしながらこちらに声をかけてきた。

なんだかんだあり、監視するおっさん、パーティーINです。

夜更けにトリム港までたどり着き、私はそのままベッドにダイブ。
ふかふかの毛布に包まれ、何の迷いも無く意識を手放した。
最近の若者は夜が遅くて困る。話なんて明日でいいじゃないか。
スローライフ生活が板に付いた私は、前世では考えられないほどに規則正しい
生活を送っていたのでおやすみ3秒だ。寝れるって素晴らしい。

そして夢のなかで桃色の少女の一方的マシンガントークを聞き流しながらも
清々しい朝を迎えた。

「あたしも、砂漠行くから。」

開口一番。リタは目覚めてすぐ、私を見るとそう宣言した。
ああ、そうなんですか。てっきり最初から一緒に行くと思い込んでいた私にとって、
少し意外なできごとだった。

「あと、レイヴンが手紙預かって来てたわよ。
なんでも、アンタのギルドからって言ってたけど。」

リタから手紙を受け取ると、しばし見つめた。

あれ、この妙にきれいな文字は副ボスだ。
特に気にせず鞄に詰め込んだ。後でゆっくり読ませてもらおう。

「船、乗るんだよねぇ。乗らなきゃ大陸渡れないもんねぇ・・・・。」

「ステラ、なにしてんだ、さっさと行くぞ。」

カウフマンさんのご協力のおかげで私たち、旅立ちます。

ユーリの声に急かされながら、陸地とさよならする。

ああ、さらばトルビキア大陸よ。

今思ったが、私みんなについていく理由がこれっぽっちも無いんですけど。

ちょっとー急ぐんだから早く乗ってよー、と声をかけるカロルの声が辺りに響いた。

あれ、私行くこと決定ですか。

船はコレだから嫌だ。

「ステラ、大丈夫です？」

「も・・もうダメ・・・。」

エステルの心配そうな顔を横目に、私は船酔いで甲板に寝そべっていた。

胃の中をぐるぐる回されたような感覚が襲い掛かる。

幼い頃から車駄目バス駄目飛行機駄目の私にとって、船は限りなくハードルが高かった。

高波に煽られる度に船は大きく傾き不規則な揺れが私の世界を襲う

のだ。

「アンタ、アスピオに来たときもこんな感じだったの？」

流石に哀れに思ったらしい。リタがいつもより若干やわらかい口調で問いかける。

「いや、船が変わると慣れるのが大変で。」

自分の家の車は酔わないけど、大型バスで社会見学に出る際、地獄を体験する学生さんは

珍しくないだろう。私もまさにそのパターン。

うちのギルドの船ならなんとなく大丈夫なのさ。

カロル少年は船の端っこで

「魚人が相手なんて・・・・失敗したらどうしよう・・・・。」

やたらぐちぐち落ち込み、レイヴンさんに慰められていた。

そして数時間後

「ちょっと・・・・・・波酔いしたのじゃ・・・・・・。」

魚人が出てきてさあ戦闘だ、という時、聞き覚えのある声がした。

あれ、と思い声の方向を見ると、魚人の口元から金色の紐のような

ものがぴょこぴょこ

揺れていた。

・・・あれ、みつあみおさげ？

その２０、お久しぶりです。（後書き）

なんだか色々すっ飛ばしました。

ヨーデルと出会ったりとかカウフマンさんとお話したりとかもあったのですが、

さすがにだらだらしすぎてしまって全部カット。

自分の書きたいシーンまでの話を繋ぐって、大変！ですね。

そしてぜんぜん会話の一つも未だに出てこないフレン君。

・・・もしかすると最後の最後まで台詞が出てこなさそうな気がします。

その21、幽霊船突入4分前。

「やれやれ、凛々の明星はおっさんもこき使うのね・・・聖核探し(アパティア)たりと、

色々やることがあるのに・・・・」

愚痴るレイヴンさん。そりゃあ2重に色々やってる彼は大変だろう。

しかし私は見ていた。今回は欠伸をしながらぼんやり状況を見ていただけだ。

本当に危なさそうな時だけ矢を打ってくれたり回復したりしてくれていたけれど、

明らかに手を抜いていた。

まあいっか。ただでさえ村八分状態の彼を追い詰めるのも可哀想だ。

今回は甘味フルコースを振舞うくらいで勘弁してやる。

レイヴンさんの言葉にユーリが反応した。

「聖核って、前にノール港で探してたアレか？」

「そうそう」

「あれっておとぎ話でしょ？あたしも前に研究したけど、理論では実証されないってわかったわ。」

「リタ、すごいねぇ。ステラお姉さんには全然さっぱりわからん話だよ。」

「そうですね！さすがリタ！」

「まっ・・・・ままま、まぁね・・・。」

顔を真っ赤にしながら私とエステルから必死に顔を反らし、蚊の鳴くような声で

答える天才少女に、一同、微笑む。

「おとぎ話っていわれてるのは、おっさんも知ってるよ。むちゃくちゃな上司を

持つと、部下は迷惑するもんなのよ。」

肩を落としながら大げさにため息をつく自称おっさん。

・・・それはどっちの上司の事なんでしょうね。

話は続かない。
いきなり魚人の一匹が大きく口を開け、小さな少女を吐き出したからだ。

「パティ・・・！」
エステルが慌てて駆け寄り治癒術をかける。
柔らかな光と共にパティの体についた細かい傷が消えていく。

「さあ、私たちも、やろうか」
私の言葉にカロルが首をかしげた。
「え、何をするの？」
「いや、さっきの戦闘でマストとか切れたし。」
そう、曲がりなりともここは船の上。
魚人たちが気を使って戦ってくれる訳が無く。しかもほとんどの被害を起こしたのは
私たちである。

「ユーリは爆砕陣と烈砕衝破使いすぎ。船の上なんだからさぁ。床に穴開くから気をつけてよ。ただでさえ床板が沈み込むのに。」

「へーい」

「ジュディスも。貴方のエアリアルコンボのせいでマストに穴が縦に開いたし。」

「あら、ばれちゃったのね。」

「レイヴンさんも。ウインドカッターでこの部分。ズタボロですよ。」

「ごめんなさーい。気をつけまっす。」

「結果、マスト張替えです。カウフマンさん、替えのマストありますか？」

にっこりと問いかけて、パティの意識が戻るまでの間。ユーリとレイヴンさんで

マストの張替えをすることになった。

これは自己負担だから。とカウフマンさんに押し切られて苦笑いのカロル君。

商売人は強かだからね。

リタは清らかな水を出してパティに付いた汚れを洗い流したりと奮闘していた。

私は何をしていたかって？もちろん床とオトモダチしていましたよ。

立ったとたんに吐き気が襲います。

「快適な航海だったのじゃ・・・」

「うそつけ。さっき船酔いだとか言ってただろ。」

ユーリの的確な突っ込みが飛んだ。

パティはまるで気にしていない。むしろその唇は笑みを作る。

トクナガさんという舵取り役が負傷してしまった為、パティが操船

の名乗りを上げた。

「世界を旅する者、船の操縦くらいできないと笑われるのじゃ。」

「ステラ、どうしましょう。私たち笑われてしまうみたいです。」

「・・・エステル、真顔でそんなこと言われても困る・・・。」

「・・・あ、あたしはエステルのこと笑ったりしないんだからねっ！」

「そうそう、りたっちの言うとー・・・グフェ」

ああ、レイヴンさんの鳩尾にリタの裏拳が入った。

いや、赤面する挙句そんな行動とられても。

レイヴンさん全く悪くなかったよ、今。

うっすら目を開けると霧が立ち込めているのがわかる。

そして轟音と共に船が揺れた。何かにぶつかったらしい。

これで氷山とぶつかったとか言われたら私はタイタニックのテーマを熱唱します。

なんて妄想を浮かべながらもみんなの元へ。

「なになに？操舵ミス？」

「失敬な。うちの腕はぴかいちなのじゃ！今回は・・・幽霊の仕業かの？」

「ちょっと、変なこと言わないでよパティ！」

ふいにどたんという音と共にタラップが降りてきた。

このフィエルティア号と幽霊船を繋ぐ橋が出来た。

「まるで・・・呼んでるみたい。」

人影も見当たらず、頼みの綱の駆動魔導器（セロスプラスティア）がうんともすんとも反応しない状態では、どうしようもない。

原因を探る為にも、ノリノリでユーリは怖がるリタとエステルとラピードを引き連れて

乗り込んだ。・・・その目はキラキラと輝いていた。ドＳだ。

「うちも連れて行くのじゃ！」

「おまえはおとなしく船とステラのお守りしてろ」

「・・・あー、よろしくです。」

パティは私の方を見て、はぁ、とため息一つ。

「そんなことじゃあ立派な海の女になれんぞ！そんなんじゃウミスズメみたいに

すぐつかまってしまうのじゃ」

「いや、ならなくっていいです。ウミスズメってナニ・・・・。」

幽霊船、突入らしいです。

その22、ないないない。

「リタ、大丈夫かなぁ。」

カロルが怖がり仲間であるリタの心配をしはじめた。

「船まで燃やさないといいんだけど、あの子。」

ジュディスが同意しながら呟く。そうですね、あんなボロ船、ファイアボール一発で

炎上して沈むと思うし。

「りたっちがパニクって無いことを祈るのみ、よねぇ。」

レイヴンさんが深刻そうな顔を貼り付けて、間延びした声で喋りだす。

因みに彼女の十八番はファイアボールだ。

とっさの時の癖で出てしまう可能性は大いにある。

「うむ。炎系はちとやばそうじゃの。」

パティもののんびりと同意した。

それは、数時間前に遡る。

「まず、ラピードは行くよな」

「わふっ」

当然のようにラピードが返事をした。

「あとはエステルと・・・」

「が、がんばります・・・。」

「リタだな。」

少女の肩はびくりと震えた。

「あたしは、駆動魔導器直さなきゃいけないのよ！」

「ふーん？」

ユーリのまるで馬鹿にしたような笑みが目に入ったのか、リタの顔が引きつった。

「コ、コワくなんてないわ！・・・行ってやろうじゃないの・・・・・。」

少女はふるふると拳を握り締めて先頭に立つ。

「ほら行くわよ！こんな面倒なこと、さっと行ってさっと終わらせるんだからっ！」

エステルが親切心から話しかける。

「リタ、あまり無理しなくても大丈夫ですよ。

他の人に代わってもらってもいいんじゃないです？」

だがそれは火に油だった。

「なにそれ、私が怖がってるみたいじゃない！そんなことないんだから！

ただ、あんなボロい船に乗り込むなんて気が乗らないだけなの！」

まるで生まれたての子羊のようにぷるぷる震える姿がなんだか可愛さと哀れみを誘った。

タラップまで不必要なほどに足音を鳴らしながら勢い良く歩き、ちょうど足を掛けた所で

くるりとこちらを振り向いた。その顔は、まるで処刑台に自ら赴く罪人のようだった。

回想おわり。

パティが甲板をトタトタとせわしなく歩き回りながら幽霊船を眺めていた。

その目はらんらんと輝いている。入る気だ。絶対入る気だ。

「今、なんか変な音がした気がするのじゃ」

綱の撓むような音が聞こえた数秒後。

「あれ見て・・・！」

カロルが遠くを指差した途端に衝撃が襲う。あ、カウフマンさんひっくり返った。

これは、私たちも行くパターンですね。

「まあ、ついといでよ。その代わり、お宝あったら、山分けよ。」

「8：2で手を打つのじゃ」

レイヴンさんとパティの熱い視線が交差する。
宝箱を先に見つけたほうが分け前の８をもらえるらしい。
そんな傾いた分け方やめようよ。こういう時に限って宝箱を見つけるのはカロルとか
ジュディスとかになってしまうのだから。ジュディス嬢はこの言葉を覆す気はないみたいだぞ。

「流石に俺たちだけだとちょっと心細いっすね」

「そういうこと言わない！もっと楽しくなる話をなさい！」

カウフマンさんは眉をへの字に曲げながら部下を一喝した。
私はにまーっと笑みを浮べ、ちょっと怖がっている女社長に話しかける。

「カウフマンさん、いいお話教えてあげましょっか。うちのギルド直伝の。」

「あんたの所のギルドは怪談話が得意って情報は割れてんのよ『朧月』！」

怒られました。・・・・ち、鋭い。

「うちはユーリからステラのお守りをまかされたからの」
そんな言葉のおかげで私も一緒に行く羽目になりました。
もう少し寝そべっておきたかった。むしろ意識を落としていたかった。
「ステラちゃーん。置いてっちゃうわよー。」
「後で探しに行く方の身にもなってほしいわ。」
「ハイハイわかってるわかってるー。」
はあ、皆さん船酔い被害者の気持ちがわからないんだ。扱いが悲しい。
一番後ろをとぼとぼ歩く。パティはぎらぎらとお宝探しに精神を集中させているらしく、
真っ先に先頭を申し出た。怖がりなカロルや面倒臭がりのおっさん、そしてそのやり取りを

後ろで見ていたいであろうジュディスというメンバーの中で非常に的確な選択である。

丁度曲がり角に差し掛かった時にふと、曇りだらけの鏡を見た。

あるべきものが、そこになかった。

「え」

ばしん、と音が出るほどに壁・・・鏡という名の壁に両手を付け覗き込む。

そこに私の顔は映し出されていなかった。

・・・・何故。

私の服や装備はしっかり写っているのに私の肌色は見えなかった。
本来手が写るべきはずの場所には反対側の壁の色が写っていた。

なにこれ呪い！？

冷静になってもう一度自分の全体を眺めると、はたまた、手までもが写らない。

私自身が全く移らないのだ。そのくせ服など私以外の物はしっかり写るらしく、

しっかり私のシルエットができていた。長袖長ズボンで良かったと思える瞬間である。

「ステラ？どうしたの？・・・なにか変なものでもあった？」

「いいや？なかった。」

いろんな意味でなかった。

鏡の中の私は、腰までである黒髪を揺らしながらみんなの後をついて行った。

その22、ないないない。（後書き）

ちょっと話が動いた・・・かな？

パティが加わったのにテンションが上がって、

必要以上に喋らせようと思ったが故に、他のキャラが空気になりそう・・・。

特にトクナガさんとか一文字も出ないという悲しさ。ごめんよ、悪気は無いんだ。

その２３、幽霊に遊ばれる話。

体全体で勢いを付け飛び上がる。

銃弾が飛ぶが、銃口の角度からある程度の着弾予測はつく。

背負っていたリュックを振り回し盾にすると共に相手の視界を奪う。

特に何も声を発する事も無く、邪魔なリュックを片手で払いのける骸骨仮面（仮）。

その隙に剣を喉元に叩き込もうとするが、ガチリと剣で止められた。

同時に互いが蹴りを放つ。ぶっ飛ぶのは私だ。当然私の方が体重軽いから！

ざりざりざり。ブーツで勢いを殺しながら必死で体制を立て直すと相手の銃のハンマーがカチリと鳴った。

慌てて後ろに飛びのく。

一瞬前まで私がいた床には無残に開いた穴と、爆発後の煙が立ち込めていた。

うわなんて恐ろしい。

胃の奥がひやりとしたと思ったら、煙の奥から剣の切っ先が飛び出し、

反射的に自分の右手を突き出した。キィン、と金属のぶつかる音が綺麗に響く。

なんでこんなに足が速いんだ畜生。間合いを取るだけでも息が上がる。

現在進行形できゃーきゃー言いながら必死で骸骨仮面に攻撃をぶつける私。

普段はやる気無しのだらけっぷりしか目にしたことがない面々はさぞかし

私の形相を見て、引いたことだろう。けど私に気遣う余裕なんて無かった。

「ステラ、どうしたのさ、そんな腕組みしちゃって。そんなに寒い？」

「いや、別に。」

聞いてくれるな、カロル君。

「歩き方、変じゃない？なんで鏡に背を向けて歩く訳？」

「いや、怪談話に鏡の話があってね。」

レイヴンさんは怖がってる誰かを見て自分の怖さを消すタイプだ。きっとそうだ。

「ふーん。だから怖いのか。大丈夫大丈夫。おっさんが、恐怖に震える

ジュディスちゃんとステラ嬢ちゃんをしっかり守ってあげるから！」

「ボ、ボ、ボクだって！」

「あら、たのもしいわね。」

「でしょでしょー？ジュディスちゃんてば、おっさんに惚れちゃったでしょー？」

レイヴンさんの会話ががちょっとうざくなる瞬間だ。

女性陣は特に怖がっていないのだが、カロルとレイヴンさんのギルド男子コンビがもう

怖がって怖がった。天井から垂れる水滴に悲鳴、どこからか聞こえる風の音に悲鳴、

ふらっとまるで幽霊のように気配無い魔物に後ろを取られて悲鳴。

あ、最後のはしょうがないか。

とにかく怖がりっぷりが半端なく歪みない。

私の不振な行動を見て、怖がり仲間ができたと喜ばれている。

いや違うよ？私は夏恒例怪奇現象特番大好きだもの。百物語とか好きだもの。

数分後、私たちは無事にユーリ組と再会した。

船内はとりあえず魔物との戦闘に困らないくらいの広さがあった。

鏡の壁が常に片面だけしか無い構造が私にとって救いだ。というか、何故鏡張りなのだろう。

ナルシストか。この船の乗組員はナルシー軍団だったのか。

とりあえず合わせ鏡状態の場所が無いので、私は常に鏡に対して背を向けていた。

だって怖いし。何回かちらちら鏡を見たけど、私の肌色、写らなかったもの。

怪談話は話すのも聞くのも大好きだが、実際にそんな体験したくは無いのだ。

辺りは当然薄暗く、ランタンで辺りを照らしながらの移動なので、幸い私の異変に気付く

人はいなかった。というか気付いてもどうしようもない気がする。

「こんなところ、早く出ようよ」

カロルの言葉が引き金になったかのように、キィィと高い音を立て

てドアが動いた。

そう簡単に扉が閉まると思うなよ！今まで私が通ったドアはすべて辺りの木材やらを使って

簡易ストッパーを付けてきたのだ。すべて、というのにはしょうもない理由がある。

だって、本編で何処のドアが閉まるとか全く記憶に無いんだもの！

私の勝ち誇る顔を他所に、ドアが平然と閉まった。あれ？

そして天井からカラン、と軽い音を立てて落ちたのは、ついさっき私がストッパーとして

ドアに咬ませた木材・・・・・・・・・・・・。

思わず全身に鳥肌が立った。負けました。私、世の中甘く見ていました。

生暖かい風が不意に頬を撫でる。思わず身震いして周りを見渡した。

ラピードは私と船の中で出会ってから、しきりにくっついてくる。

心配してくれるのは嬉しい。が、動物の感でこいつ危ないとか思われてたらどうしよう。

「きっとこの船の悪霊達が私たちを仲間入りさせようと船底で相談してるんです・・・！」

仲間に入れる相談とかなにそれ。ずいぶんとメルヘンな悪霊達である。

これは笑うところなのか怖がるところなのか。

階段を上がり、船長室にたどり着いた。

ユーリがドアをがちゃがちゃと鳴らし、「開かねぇな」と呟いた。

ふむふむ。船長さんの日誌をみんなが読んで紅い小箱を誰が取るかでもめている間、

興味が沸いたのでドアノブを回してみた。

かちゃ、と音がして少しドアが開く。あれ？

回った。あっけなく扉が開いた。あれ？

外からの冷たい風が私の頬を撫でる。あれ？

ユーリ達の方を向いて、開いたんだけど、と声をかける数秒前。

いきなりドアの向こう側から強い力で押された。
一切音を立てず、かなりの衝撃を私に与えて扉は閉まった。
紅の小箱に気を取られている一行は私の行動に気が付きもしなかった。なんと薄情な。

確かに外から誰かの息遣いが聞こえた気がした。
こ・・・・・怖いよ!!!
「あぁぁ・・・・・・・・」
思わず悲痛な声が漏れた。
急に部屋の温度が下がった気がした。いや、私の体感温度は確実に下がったよ。
まるで冷水を思いっきりかけられたかのような気分だ。
無意識に震える手を押さえつけながら思う。
帰りたい。切実に帰りたいよぉ!

「ちょっとステラ！なにボーっと突っ立ってんのよ！はぐれたらあたし達が
苦労すんのよ！ちょっとこっち来なさい！」
リタはいつもに増して口調が荒い。レイヴンさんの笑い声も聞こえたので、きっと
からかわれた後なのだろう。私、貴方の盾では無いんですが。

リタに近づいて、小箱を眺める。へぇー。とても千年前とは思えないほど立派な箱だった。
金具部分には細かい装飾がされている。大空を羽ばたく鳥のイメージだろうか。
大きな翼を模った紋章が覗く。
この中に・・・・・。

『滞留エアルの乱れに対する歪み・・・今の私には関係の無いことだ。』

紅の小箱に意識を向けた途端、

声がした。声、というか息、というか。まるでひそひそと後ろから話されている

みたいだ。男の声なのか女の声なのかわからない。

真横のリタに「今、なんか声が」と呟いたとたんグーで殴られた。

鼻が痛い。

カロルのおびえた声がする。

あ・・・・。骸骨。

さっきの呟きはこの人だよね？怨霊ですと言われるよりその方が色々と怖さが薄れる。

アレだよ、愛しのアイフリードさんに話しかけようとして失敗したんだよ色々と。

こいつが一言でも喋ってくれたら私の気は晴れる気がするようなしないような。

ついでに一連のドア騒動も自白してくれ。怖くて怖くてしょうがないから。

もしや悪霊に取り付かれたかもって思ってるから。この世界に霊媒師さんなんていたっけって

必死で考えてるから！

だから、だから・・・・。

「なんか喋ってくれぇぇぇぇ！」

戦う目的が変わった瞬間だった。

「あの子、結構強かったのね。今まで手を抜いていたのかしら。」

「俺の知り合いが、『アイツはお守り代わりに連れて行くといい』って

言ってたんだが・・・・ホントだったんだな。正直信じてなかったけど。」

「ボク・・・あんなにステラが剣振り回すところ、はじめて見た。」

「あたしもよ。むしろ剣使ってる所初めて見たわ。」

「すごいですね・・・。一人であの魔物に・・・しかも対等に立ち向かってます。」

「ありゃあ結構な手練れだわ。ギルドでも相当な地位なんじゃないの？あの嬢ちゃん。」

「なんだかつまらないわ。あれだけ盛り上がっている所に水を注すのも悪いし。」

「む・・・・・・？」

その２３、幽霊に遊ばれる話。（後書き）

戦闘シーンってなんて難しいんだっ！、と思いました。
でも書いてて楽しい・・・。
拙い文章ですがスミマセン・・・・（汗）
とりあえず意味が伝わってるといいな、と願うほどに文章力悪しな
実力です（泣）

その２４、さあさあ港へ向かいましょう。

「ふっふっふ。隙あり！なのじゃ！」

「わふん！」

パティの声で動きをわずかに止める骸骨仮面（仮）。

パティのフライパン攻撃とラピードの顔面キックが交差する。

それぞれ別方向から来た所為か、攻撃は見事に決まった。

「・・・・・・・」

主にパティを見つめながら、気が済んだかのようにマントを翻す骸骨仮面（仮）。

鏡に入ったその姿を無意識に追うパティの首根っこを掴んだのはユーリだった。

「今はわざわざ戦いに行かなくてもいいんじゃない？あっちは引いてるんだし。」

「そうそう、白黒つけなくたっていいだろ」

なんだか決まり悪そうにしている少女に私とユーリが問いかける。

その顔は曇ったままだった。

「私、その澄明（クリアシエル）の核晶をヨームゲンに届けてあげたいです。」

この提案は全員が眉を顰めた。

気持ちはわからないでもない。だが誰がこれの帰りを待っているのだろう。

それに、一々そんなことをしていればどんどんやるべきことが溜まっていく。

フェローどころの話ではなくなるのだ。

「駄目だよ！基本的にボク達みたいなちっちゃなギルドは、一つの仕事を完了するまで

次の仕事は受けないんだ。」

ジュディスの口が開く前に、すばやく言葉を紡いだ。

「では、うちが承りましょう。」

難色の色を浮かべた凛々の明星期待の首領に代わり、私が申し出た。

「朧月（ヘズィームーン）がその澄明（クリアシエル）の核晶届け、やるよ。」

ヨームゲンってあそこだよね。一面砂漠の。

「ちょっとちょっと、大丈夫？ステラのギルドの人達、迷惑しない？」

カロルが心配げに聞くが、全然問題は無い。

「大丈夫。何個でも依頼を受けてＯＫなのがうちのギルドの特徴だから。自己責任になるけどね。」

レイヴンさんの目が点になる。

「へぇぇ。珍しいねぇ。上が下の者達の腕をよっぽど信用してないと出来ない芸当だ」

だってその方が色々と効率が良いし。うちのギルドは単体で動くのでわざわざ一回ごとに

報告に来るのが面倒なのだ。ただそれだけのこと。

自分のことは自分で責任取らなきゃいけないけど、なんだか気楽だ。

エステルの笑顔が輝く。

「それじゃあヨームゲン探しはあんたの管轄になるってことね。あたしももし暇な時が
あったら、文献さがしとか手伝うわよ。あんた文字読むの遅いでしょ。」
ゲライオス文明の文献はスラスラ読んでるのに。訳わかんないんだから。とため息をつかれた。
リタが珍しく手伝ってくれるらしい。
みんなと仲良くなったおかげだろうか。
エステルの笑顔に輝きが増す。
「ボク達だって、少しは手伝うよ！」
とりあえず話はまとまったようだ。
箱は私が持つことになった。
机に置いてある箱を持つと、ぶわりと熱風が通り抜けた。なんだこれ。
『・・・・小物か』
男か女かわからない、小さい声が頭の中に響いた。
・・・・・・もしや、喋り声は小箱から聞こえるのではないだろうか。

「全く、次々とトラブルに巻き込まれて・・・。ここに残ってたのが私じゃなかったら、

あんた達置いていくわよ。」

カウフマンさんは心底ほっとしたような表情を浮かべながらも強がりな言葉を吐いた。

私相手では火に油を注ぐ結果になるのを見越したユーリがそれとなく相手をしている。

私とリタは箱が開くかどうか試していた。

術を使っても開かない。剣は通らないで苦戦中だ。その間にもパティの船さばきで

港へとたどり着く。

「どーなってるのよこの箱ぉ！」

レイヴンさんのウインドカッターが効かない時点で予想はついた。
自分の技が通用しなかったのが悔しかったのか、後に人目を気にしながら
本気モードのウインドカッターをこっそり放っているのを目撃した。
おいおい、今までどれだけ貴方が手を抜いていたかがさっきの一撃でわかったんだけど。
それでも壊れなかった頑丈さ。これはもう、鍵が無いと無理だ。
空気中のエアルの流れを敏感に感じ取った澄明の核晶が周りのエアルを変換して
障壁を作っているらしい。
確証は無いが声無き声がそれとなく解説していた。
幽霊船から離れたのに、まだ声は聞こえる。

その２４、さあさあ港へ向かいましょう。（後書き）

空気キャラが多すぎる・・・・ｏｒｚ
ジュディスさん一言も喋ってない。そしてラピードも活躍させる宣言したのになんか・・・・（涙）
次回以降にまた頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6728t/

流星の朧月

2011年11月28日11時47分発行